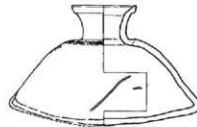


福岡市埋蔵文化財調査報告書第915集

羽根戸古墳群6

—羽根戸古墳群N群第9・10次調査報告書—

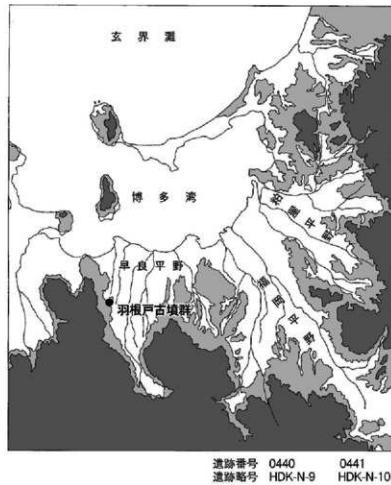


2006

福岡市教育委員会

羽根戸古墳群 6

— 羽根戸古墳群N群第9・10次調査報告書 —



2006

福岡市教育委員会

序

福岡市西部に位置する飯盛山の山裾は、古墳時代の墳墓群が群集する地域として知られ、現在まで良好な自然環境とともにこれらも保存されてきました。

しかしながら近年、西部郊外の緑地には都市開発の波が及んできており、周辺の景観や歴史的環境が大きく変わろうとしています。

福岡市では、これら開発によって失われていく文化財を後世に記録として残していくために発掘調査を実施しておりますが、本書は農業用資材倉庫の建設および資材置場兼菜園の造成に伴い調査を実施した羽根戸古墳群第9次調査および10次調査の成果を報告するものです。

今回の調査では、円墳の石室に副葬された鉄刀に付着していた昆虫の痕跡から、古墳時代後期の葬送儀礼に関する貴重な知見が得られるなど、学術的にも重要な成果を挙げることができました。今後、本書が文化財への理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料として内外で活用していただければ幸いに存じます。

末尾になりましたが、発掘調査から本書の作成にいたるまで、多大なご協力をいただきました永江徹様、趙文霞様はじめ、羽根戸地区の皆様等、関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成18年12月28日

福岡市教育委員会

教育長 植木 とみ子

第9次調査

追跡調査番号	0 4 4 0		遺跡番号	HDK-N-9	
地番	福岡市西区大字羽根戸字大原		分布地図番号	叶岳105	
開発面積	1,601m ²	調査対象地	333m ²	調査面積	333m ²
調査期間	平成16年8月2日～平成16年9月16日				

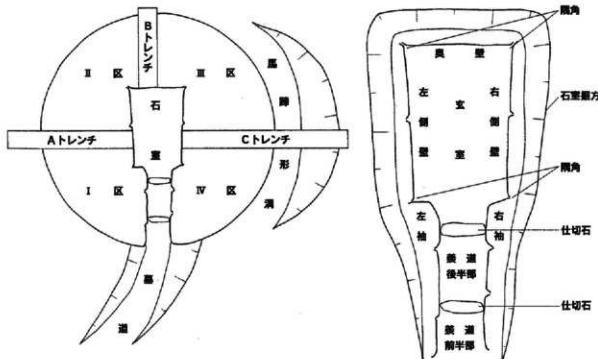
第10次調査

追跡調査番号	0 4 4 1		遺跡番号	HDK-N-10	
地番	福岡市西区大字羽根戸字大原		分布地図番号	叶岳105	
開発面積	1,004m ²	調査対象地	369m ²	調査面積	369m ²
調査期間	平成16年8月23日～平成16年11月19日				

例　言

1. 本書は、農業用資材倉庫建設及び資材置場兼菜園に伴い、福岡市西区大字羽根戸字大原734番1,735番、733番1地内で発掘調査を実施した羽根戸古墳群N群第9次・10次調査の報告書である。
2. 調査記録の作成および整理分担は、次のとおりである。

遺構実測……………吉留秀敏、田上勇一郎、井上蘭子、木下博文、松浦一之介
遺物実測……………松浦一之介、谷直子（九州大学大学院生）
遺構写真撮影……………田上勇一郎、松浦一之介
遺物復元……………木下久美子、田中由紀、宮崎由美子、長浦美美子
金属製品保存処理……………比佐陽一郎、片多雅樹（福岡市埋蔵文化財センター）
製図……………松浦一之介、木下久美子、山口朱美
本文執筆……………松浦一之介
3. 本書で使用した方位は磁北であり、座標は国土調査法第Ⅱ系に拠る。また、標高は東京湾平均海面高度（T.P.）に拠る。
4. 本書で使用した地図は国土地理院発行の1：2,500地形図「福岡西部」、「福岡西南部」、および福岡市発行の福岡市都市計画図を原図としている。
5. 本書で使用した遺構の略号は、奈良文化財研究所の用例に拠っている。
6. 本書に関わる遺物および部材等の全資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。
7. 本書の編集は、松浦一之介が行った。
8. 本書で使用する墳丘に設定したトレンチの名称とそれに区画される墳丘各区の番号、古墳および石室各部位等の呼称は、下図に示した通りである。



本文目次

第1章 はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
(1) 第9次調査	1
(2) 第10次調査	2
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境	3
第3章 第9次調査の記録	5
1. 調査の概要	5
2. 16号墳	5
(1) 位置と現況	5
(2) 墳丘	5
(3) 内部主体	10
(4) 出土遺物	14
3. まとめ	17
第4章 第10次調査の記録	18
1. 調査の概要	18
2. 20号墳	18
(1) 位置と現況	18
(2) 墳丘	18
(3) 内部主体	23
(4) 出土遺物	24
3. 21号墳	24
(1) 位置と現況	24
(2) 墳丘	24
(3) 内部主体	26
(4) 出土遺物	29
4. 小石室墳50-01	33
(1) 位置と現況	33
(2) 墳丘	33
(3) 内部主体	33
(4) 出土遺物	33
5. まとめ	34
第5章 羽根戸古墳群N-20・21号墳出土遺物の保存科学的調査について	35

図版目次

図1 早良平野の古墳群 (縮尺1/50,000)	4
図2 羽根戸古墳群分布図 (縮尺1/8,000)	4
図3 16号墳現況測量図 (縮尺1/200)	5
図4 16号墳墳丘遺存状況図及び地山地形測量図 (縮尺1/200)	6
図5 16号墳墳丘全景 (東から)	7
図6 16号墳墳丘遺存状況 (北から)	7
図7 16号墳地山地形 (北から)	7
図8 16号墳墳丘断面図 (縮尺1/60)	8

図9	16号墳外縄列石実測図及び墳丘遺物出土状況図（縮尺1/80、1/20）	9
図10	16号墳墳丘外縄列石検出状況（南から）	9
図11	16号墳墳丘I区A群遺物出土状況（西から）	9
図12	16号墳墳丘I区F群遺物出土状況（西から）	9
図13	16号墳墳丘IV区E群遺物出土状況（南から）	9
図14	16号墳石室実測図（縮尺1/40）	11
図15	16号墳閉塞施設検出状況（東から）	12
図16	16号墳閉塞施設検出状況（東から）	12
図17	16号墳閉塞施設検出状況（南から俯瞰）	12
図18	16号墳閉塞施設土層（南西から）	12
図19	16号墳石室全景（東から俯瞰）	13
図20	16号墳石室全景（狭道側から）	13
図21	16号墳石室掘方と石室（北から）	13
図22	16号墳石室玄門間（東から）	13
図23	16号墳石室奥壁（西から）	13
図24	16号墳石室左側壁（西から）	13
図25	16号墳石室右側壁（北から）	13
図26	16号墳義道左側壁（南西から）	13
図27	16号墳義道右側壁（北東から）	13
図28	16号墳出土遺物実測図その1（縮尺1/4）	15
図29	16号墳出土遺物実測図その2（縮尺1/4）	16
図30	10次調査地点現況測量図（縮尺1/200）	19
図31	10次調査地点調査前現況（南西から）	19
図32	20号墳調査前現況（南東から）	19
図33	20号墳調査前現況（北東から）	19
図34	21号墳調査前現況（北西から）	19
図35	20号墳墳丘遺存状況（西から）	20
図36	20号墳地山地形（北から）	20
図37	20、21号墳墳丘遺存状況図及び地山地形測量図（縮尺1/200）	21
図38	20号墳墳丘断面図（縮尺1/60）	22
図39	20号墳墳丘断面（南から）	22
図40	20号墳外縄列石実測図（縮尺1/100）	22
図41	20号墳墳丘外縄列石検出状況（北から）	22
図42	20号墳墳丘外縄列石第2面検出状況（北から）	22
図43	20号墳墳丘外縄列石第3面検出状況（北から）	22
図44	20号墳石室実測図（縮尺1/40）	23
図45	20号墳石室全景（東から俯瞰）	23
図46	20号墳石室奥壁（西から）	23
図47	20号墳石室左側壁（南から）	23
図48	21号墳墳丘断面図（縮尺1/60）	25
図49	21号墳墳丘断面（西から）	25
図50	21号墳墳丘断面（北から）	25
図51	21号墳墳丘遺存状況（北から）	25
図52	21号墳地山地形（西から）	25
図53	21号墳石室、閉塞施設、遺物出土状況実測図（縮尺1/40、1/20）	27
図54	21号墳石室全景（西から）	28
図55	21号墳石室床（東から）	28
図56	21号墳石室遺物出土状況（南から）	28
図57	21号墳閉塞施設検出状況（南から俯瞰）	28
図58	21号墳閉塞施設検出状況（東から）	28
図59	21号墳I区墳丘A群遺物出土状況（西から）	28
図60	21号墳I区墳丘B群遺物出土状況（北西から）	28
図61	20、21号墳出土遺物実測図（縮尺1/4、1/3、1/2）	31
図62	21号墳出土装身具実測図（縮尺1/2）	32
図63	小石室填 SO-01石室、遺物出土状況、出土遺物実測図（縮尺1/40、1/20、1/4）	33
図64	SO-01石室全景（南から）	33

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯と調査体制

(1) 第9次調査

平成16年1月16日、個人事業者より福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課（現 埋蔵文化財第1課）に対し、福岡市西区大字羽根戸字大原735番736番地内の902m²について、同地内における家庭菜園建設に伴い、埋蔵文化財の有無に関する照会があった。これを受け本課では、同申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である羽根戸古墳群N群及び同古墳群I群の隣接地に相当することから、同年2月3日に現地での発掘調査を実施した。その結果、今回の申請地内においては埋蔵文化財が確認されず、予定されている工事の内容は埋蔵文化財への影響がないものと判断された。

しかしながら、同申請者によって申請内容とは異なる造成工事が申請地に隣接する羽根戸古墳群N-16号墳の墳丘裾部付近で無断着工されており、その結果、同古墳の一部を既に破壊されていることが判明した。これに対し本課では、文化財保護法第57条の2に基づき、工事を継続する場合は記録保存のための発掘調査が必要との旨を、再三に亘り勧告したが、その後同地は軒売され、同年7月30日、永江徹氏より本課に対し、あらためて福岡市西区大字羽根戸字大原734番1,736番地内の1,601m²について、同地内における農業用資材倉庫建設に伴い埋蔵文化財の有無に関する照会があった。審査の結果、予定されている工事内容は埋蔵文化財への影響があるものと判断され、設計変更を含めた現地での保存を協議した。しかしながら、設計変更是不可能と判断され、申請地内での遺構の破壊が回避できないため、その箇所を対象とした記録保存のための発掘調査を実施することになった。

調査対象面積は、申請地内のうち333.0m²である。平成16年7月30日に発掘調査に関する事前協議確認書を締結し、平成16年8月2日から同年9月16日まで発掘調査を実施した。なお、資料整理・報告書作成は平成18年度に行つた。調査の体制は以下の通りである。

<調査体制>

調査委託	永江 徹
調査主体	福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課（現 埋蔵文化財第2課）
教 育 長	植木 とみ子（現任）、生田 征生（前任）
文化財部長	山崎 純男（現任）、堺 徹（前任）
試掘担当	埋蔵文化財課事前審査係（現 埋蔵文化財第1課事前審査係）
係 長	瀬石 哲也（現任）、池崎 謙二（前任）
担 当	本田 浩二郎（現任）、井上 蘭子（前任）
調査担当	埋蔵文化財課調査第1係（現 埋蔵文化財第2課調査第2係）
課 長	力武 卓治（現任）、山崎 純男（前任）
係 長	池崎 謙二（現任）、田中 審夫（前任）
担 当	松浦 一之介

調査体制

庶務担当 文化財整備課（現 文化財管理課）
課長 横本 労治
管理係長 栗須 ひろ子（現任）、市坪 敏郎（前任）
管理係 後藤 泰子

尚、発掘調査から報告書作成に至るまで、永江徹氏をはじめ、羽根戸地区の地域住民等関係各位には多大なご協力とご理解をいただいた。記して謝意を表する次第である。

（2）第10次調査

平成16年7月14日、趙文霞氏より福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課（現 埋蔵文化財第1課）に対し、福岡市西区大学羽根戸宇大原733番1地内の1,004.00m²について、同地内における資材置場兼菜園建設に伴い、埋蔵文化財の有無に関する照会があった。これを受け本課では、同申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である羽根戸古墳群N群の範囲に含まれており、同古墳群20号・21号墳の2基の円墳が確認されていることから、予定されている工事内容への影響があるものと判断され、設計変更を含めた現地での保存を協議した。しかしながら、設計変更是不可能と判断され、申請地内での構造の破壊が回避できないため、その箇所を対象とした記録保存のための発掘調査を実施することになった。

調査対象面積は、申請地内のうち369.0m²である。平成16年7月30日に発掘調査に関する事前協議確認書を締結し、平成16年8月23日から同年11月19日まで発掘調査を実施した。なお、資料整理・報告書作成は平成18年度に行なった。調査体制は、以下の通りである。

<調査体制>

調査委託 趙文霞
調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課（現 埋蔵文化財第2課）
教育長 横木 とみ子（現任）、生田 征生（前任）
文化財部長 山崎 純男（現任）、堺 徹（前任）
試掘担当 埋蔵文化財課事前審査係（現 埋蔵文化財第1課事前審査係）
係長 濱石 哲也（現任）、池崎 謙二（前任）
担当 本田 浩二郎（現任）、井上 蘭子（前任）
調査担当 埋蔵文化財課調査第1係（現 埋蔵文化財第2課調査第2係）
課長 力武 韶治（現任）、山崎 純男（前任）
係長 池崎 謙二（現任）、田中 審夫（前任）
担当 松浦 一之介
庶務担当 文化財整備課（現 文化財管理課）
課長 横本 労治
管理係長 栗須 ひろ子（現任）、市坪 敏郎（前任）
管理係 後藤 泰子

尚、発掘調査から報告書作成に至るまで、趙文霞氏をはじめ、羽根戸地区の地域住民等関係各位には多大なご協力とご理解をいただいた。記して謝意を表する次第である。

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

福岡市西半部を占める早良平野は、背振山地の一支部である油山（標高569.4m）から派生する平尾丘陵と、同じく背振山系の企山（標高967.2m）から派生し長柄山に至る丘陵によって東西を画される沖積平野である。平野の中央には、背振山地を水源とする室見川が貫流し、右岸には樋井川、稀繆川、金屑川などが、また左岸には十郎川、名柄川の小河川が博多湾に注ぎ、平野の奥部では日向川などが室見川の支流をなしている。

古代には筑前国早良郡が置かれ、和名類聚抄に、田比伊、能津、櫛田、早良、平群、山部、曾我の7郷が記述されている。うち室見左岸には、額田、平群、曾我の3郷が比定される。額田郷は、名柄川上流左岸と十郎川上流域付近のほぼ旧方村の範囲に相当する。平群郷は、室見川中流から日向川と、名柄川上流に挟まれた戸切、羽根戸、飯盛周辺と考えられている。曾我郷の比定地は明確でないが、西区吉武付近とする説がある。

室見左岸の平野線辺は、右岸の油山山麓と並んで後期古墳群が集まる地域として知られている。早良平野を統括する首長墓としては、室見右岸の平野部に位置する中期の前方後円墳・坪原古墳（全長70m）以後、継続古墳へと継続すると考えられているが、以後断続し群集墳の形成を見る。特に飯盛山周辺には夥しい数の群集墳が確認されている。平野線辺から外れる独立丘陵には、五島山古墳群（4基）や、小戸古墳群（7基）などの小群集墳がある。

平野西線の古墳群は、北から長垂山古墳群（11基）、草場古墳群（12基）、草刈古墳群（6基）、広古石古墳群（20基）、広石南古墳群（7基）、高崎古墳群（6基）、コノリ古墳群（8基）、野方古墳群（19基）、野方勧進古墳群（1基）、羽根戸古墳群（14基）、羽根戸南古墳群（37基）、飯盛古墳群（5基）、金武古墳群（167基）、妙見古墳群（4基）、浦江古墳群（18基）、黒塚古墳群（4基）、西山古

墳群（4基）、黒塔古墳群（9基）、白塔古墳群（22基）、長峰古墳群（19基）等が分布する。

羽根戸古墳群は、飯盛山（標高582.4m）とその北西に位置する叶岳（標高340.5m）の間に名柄川源流によって複雑に開析された標高30～150m付近の丘陵群に立地している。古墳群は、その立地からA～Qの17支群に分けられ、現在147基が確認されている。現在まで墓園建設やその他の開発に伴って10次にわたる記録保存を目的とした発掘調査が実施されてきた。各支群の内、H群はその墳丘規模から本古墳群を統括する首長墓群と目され、現在、伊勢神宮微古前に収蔵される裝飾付器台はここから出土したものと伝えられている。

羽根戸古墳群N群は、H群の南側に接した標高50～90m付近のなだらかな尾根上に立地しております、30基の円墳から構成される。N群ではこれまで、市営西部墓園建設に伴い1～8、27、28、30号墳の11基が調査された。

本古墳群周辺の古墳時代以降の集落としては、羽根戸遺跡、野方中原遺跡等で堅穴住居跡が調査されている。古代以降、延喜式に記される「額田駅」は、早良郡衙比定地の有田遺跡から広石峠を抜ける野方周辺の官道沿いにあったと考えられており、城ノ原廢寺址も存在する。また下流域の下山門敷町遺跡では、製鉄関連の大規模な官衙的獨立柱建物群が検出された。羽根戸古墳群の西側丘陵斜面では、羽根戸原B遺跡、羽根戸原C遺跡が隣接し、C遺跡では、堅穴住居跡や獨立柱建物から構成される古墳時代後期の集落遺跡が検出された。またB遺跡は、宅地造成により遺跡の殆どが消滅しているが、試掘調査等の結果、鉄溶を含む7世紀代の遺構の存在が確認された。

これら製鉄関連の集落遺跡や鉄溶供獻古墳の存在から、被葬者と鉄生産との深い関連を窺うことができる。

遺跡の位置と周辺の古墳群

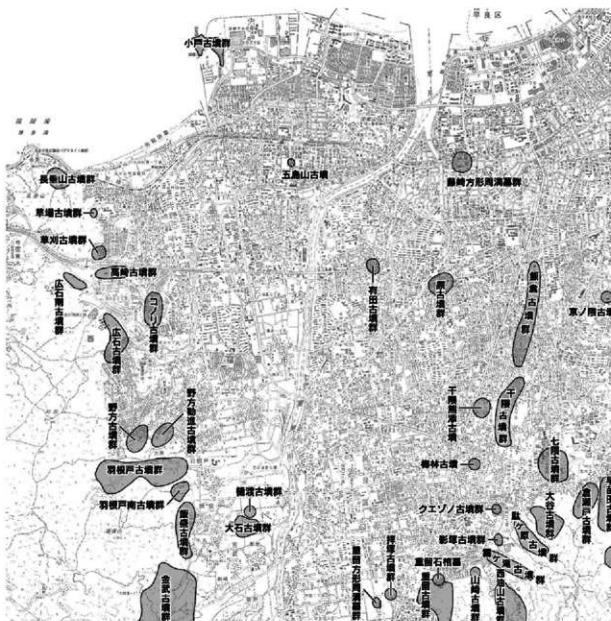


図1 星良平野の古墳群(縮尺1/50,000)



図2 羽根戸古墳群分布図(縮尺1/8,000)

第3章 第9次調査の記録

1. 調査の概要

第9次調査地点は、福岡市西区大字羽根戸字大原734番1,736番地内に所在する羽根戸古墳群N-16号墳の調査である。飯盛山から北東側に延びる丘陵斜面上に立地し、標高は約59~61mを測る。調査前の現況は雜木林で、墳丘の西側と南側裾部が道路の開削等で削平されていた。また墳頂部や墳丘斜面は、重機によって一部が掘削され、内部主体や外護列石の石材が露出していた。

調査は現況測量の後、主体部を掘り下げ、その主軸に沿って墳丘の規模と構造を把握するため3本のトレンチを設定・掘削した。トレンチの土層観察に従い覆土や周溝の堆積等を除去し、墳丘の遺存状況、墳丘の供獻遺物の出土状況、外護列石、地山整形面、石室掘方、石室基底面まで調査・記録した。

2. 16号墳

(1) 位置と現況 (図3)

羽根戸古墳群N-16号墳は、支群のやや東寄りに位置し、現況の最高所で標高61.00mを測った。周辺には、15、18、19、20号墳が隣接し、それぞれ約25m程度離れている。

(2) 墳丘 (図4~10)

地山整形

墳丘築成に伴う地山整形は、丘陵北側から西側を経由して南側に至る馬蹄形構の掘削と、東側の墳裾の削り出し、及び墳丘基底面の整形と石室掘方からなるものと考えられる。このうち西側と南側は、既設の道路下に位置しており、蒸道を含めこれらは工事により既に失われているものと判断され、原形は不明である。

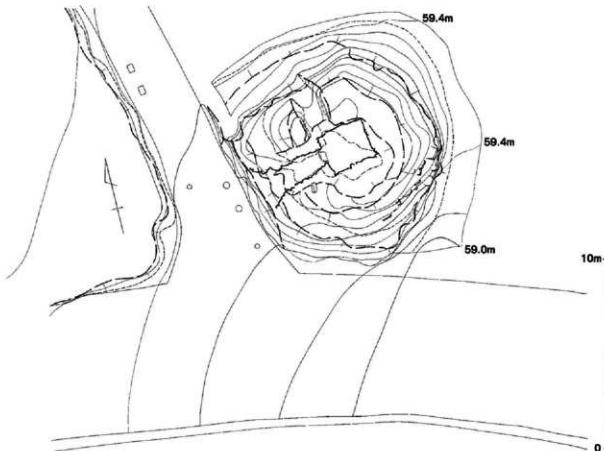


図3 16号墳現況測量図(縮尺1/200)

16号墳の墳丘

北側の馬蹄形溝は、墓道から伸びてくるものと推測される。調査前に想定された墳丘の範囲よりもかなり大規模なものであることが調査中に判明したため、重機を投入して調査区を挖掘し、馬蹄形溝の範囲確認に努めた。しかしながら調査予算と期間の都合上、馬蹄形溝の立ち上がりは北側の一部で確認できたのみである。この箇所で確認できた馬蹄形溝の幅は、最大5m、深さは約1mを測り、断面形は緩やかなU字形を呈する。馬蹄形溝底部の標高は、最も西側で58.8m付近であり、東側に向かって緩やかに傾斜している。

墳裾は石室の中心から約8.5mの距離に位置し、北側の馬蹄形溝から南側の馬蹄形溝に繋がる。最も低い箇所での標高は、58.0m付近を割る。

南側で検出された馬蹄形溝は、道路の開削で削平されその一部を検出したに過ぎない。検出された最大幅は約3mを測るが、南側にむかって幅が広がり、標高が高くなると推測される。

墳丘基底面の臺形は、ほぼ全面で古墳築造以前の旧表土層（有機質高食土層）を検出したことから、丘陵の旧地形をそのまま利用したものと推測される。墳丘基底面の標高は、59.3m～58.75mを測り、西から東に向かって緩やかに傾斜している。

石室掘方

石室掘方は、尾根筋の斜面等高線に対してほぼ直角に掘削されている。平面形は正方形に近い隅丸長方形を呈し、最大幅3.7m、長さ5.4mを測る。表面側が不整形に埋まる。墳丘基底面からの掘削深度は0.4～0.6mを測り、比較的浅い。

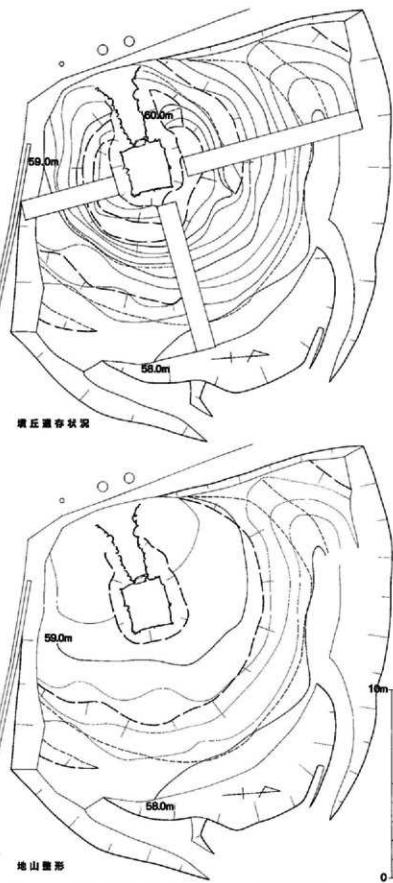


図4 16号墳墳丘遺存状況図及び地山整形測量図(縮尺1/200)

16号墳の墳丘



図5 16号墳墳丘全景（東から）



図6 16号墳墳丘遺存状況（北から）



図7 16号墳地山整形（北から）

16号墳の墳丘

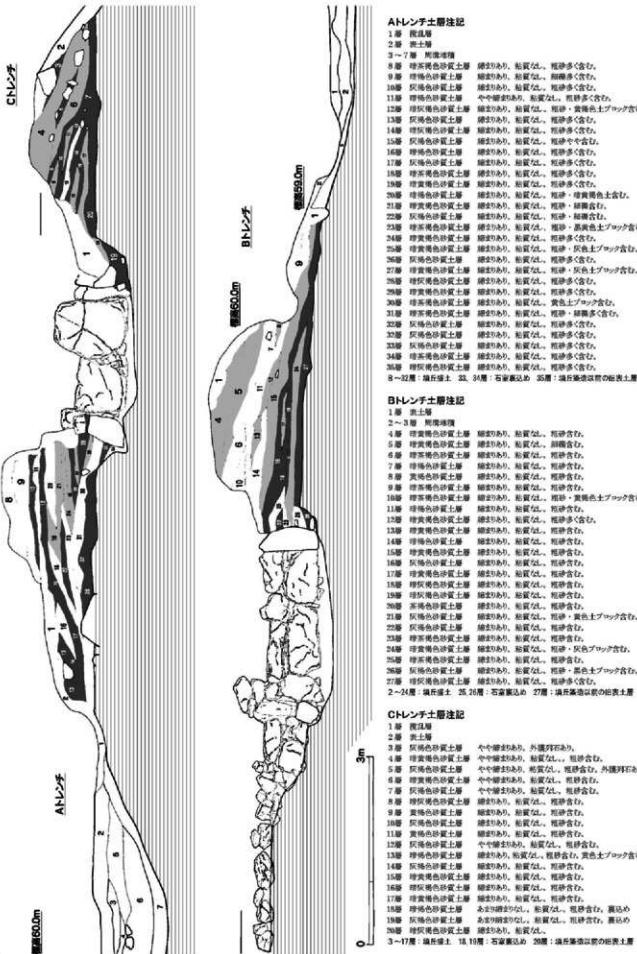


図8 16号墳墳丘断面図(縮尺1/60)

16号墳の外護列石

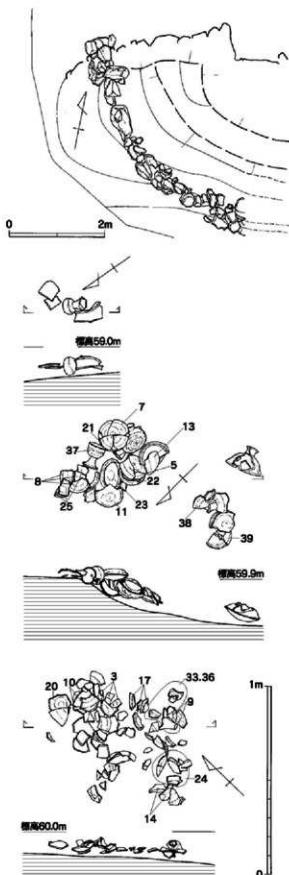


図9 16号墳外護列石実測図及び墳丘遺物出土状況図(縮尺1/80、1/20)



図10 16号墳墳丘外護列石検出状況(南から)



図11 16号墳墳丘I区A群遺物出土状況(西から)



図12 16号墳墳丘I区F群遺物出土状況(西から)



図13 16号墳墳丘IV区E群遺物出土状況(南から)

盛 土

盛土は、石室の構築過程と並行して行われたと考えられる。盛土の工程は、石室の裏込的なものと、墳丘基底面より上部の盛土に大別される。

第一段階の盛土は、石室腰石の据え置きの際、墳丘基底前面から流し込むように盛られ、他層と比較して硬度がやや落ちる。

第二段階の盛土は、版築状の盛土と外護列石を多用して構築される。各トレンチの土層観察から、その工程は數段階に分けられると推測されるが、遺存状況が良好でなく、明確にできない。各盛土の厚さは、5~25cm程度を測り、作業ヤードとなる平坦面を確保しながら盛土される。盛土に使用される土砂は、地山（黄褐色花崗岩／バイオラン）由来の黄褐色砂質土や茶褐色砂質土を生成とし、細砾や礫を混入している。墳丘基底面からの盛土の厚さは、最大1.4m程度遺存している。

また、墳丘Ⅲ・Ⅳ区では外護列石を確認した。この外護列石は、墳丘盛土内の埋め殺し的なもので、石室の中心から半径4m付近を環状に巡っている。石材はⅣ区では1段ないし2段程度組まれている。外護列石の漢道側端部の石材は、漢道端部の側壁となっている。Ⅲ区ではやや広範囲に据えられていたが組まれてはいない。使用される石材は全て花崗岩の軽石で、長さは20~80cmを測る。外護列石を含む盛土層の厚さは、厚いところで40cmを測り、墳丘の中心付近と比較して厚く硬度がやや落ちる。また現況測量の際、墳丘Ⅲ区では表面に上面の外護列石が露出していたが、無断着工の工事によって破壊されていた。

墳丘規模は、石室の中心から墳頂までの距離を反転して、直径17.0m程度の円墳と推定され、本古墳群でもN-8号墳（墳頂20m・現状保存）に次ぐ規模と考えられる。

(3) 内部主体（図14~27）

16号墳の内部主体は、西側の丘陵上方に向かって開口する両袖式单室の横穴式石室である。玄室主軸はN-78°-Eを測る。石室は上半が大きく破壊されており、遺存状況は良好でない。

玄 室

玄室規模は、奥幅204cm、前幅214cm、右側壁長239cm、左側壁長238cmを測る正方形に近い長方形平面を呈する。使用される石材は、花崗岩軽石と割石であるが、石室中心から4m付近の漢道左右側壁に玄武岩が1対2個使用されている。丁度この位置は、墳丘Ⅳ区で検出された外護列石付近に相当し、石室の構築と同時に使用された墳丘盛土の構築と関連するらしからの目的的な役割を果たしたものと推測される。

奥壁は、腰石のみ遺存している。腰石は、高さ135cm×幅90cm×厚さ40cmのやや不整形な石材と、高さ80cm×幅80cmの石材を縦位に並べて立てている。間隙には小砾を充填しており、両側壁から抉れています。

左側壁は、3石を腰石としている。玄門側の石材は長さ70cm×幅40cmを測り、これのみ縦位に立てて使用される。奥壁側の2石は横位に並べて立てて使用される。奥壁側の2石は長さ90~100cm×高さ50cmを測り、横方向に目路が通っている。2段目の石材も横方向に目路が通っているが、やや小振りである。間隙には小砾を充填している。玄門側のみ一部4段まで石材が遺存するが、2段目同様小振りである。

右側壁は、2石を腰石としている。奥壁側の石材は長さ150cmを測り、遺存する石室石材中最大と考えられるが、上半が割られている。玄室側に面する標高59.7m付近に、長さ30cm程度の細長い鉄鋸痕が認められ、刀剣等の副葬品の痕跡と考えられる。玄門側の石材は、高さ70cm×幅90cm程度の石材を立てて使用し、天端を上面に向け、左側壁腰石の高さとほぼ同一である。

玄門部は両袖で、玄門幅は63cmを測る。袖幅は、右袖73cm、左袖62cmを測る。左袖石は、高さ125cm×幅50cm×厚さ40cmを測り、最大面を玄室側に向け、縦位に立てて使用している。側壁との間には、小砾を充填している。右袖石は、上半が割られ、幅6cm程の横痕跡が4箇所残る。幅80cm×厚さ40cmを測り、最大面を玄室側に向け、縦位に立てて使用している。

16号墳の石室

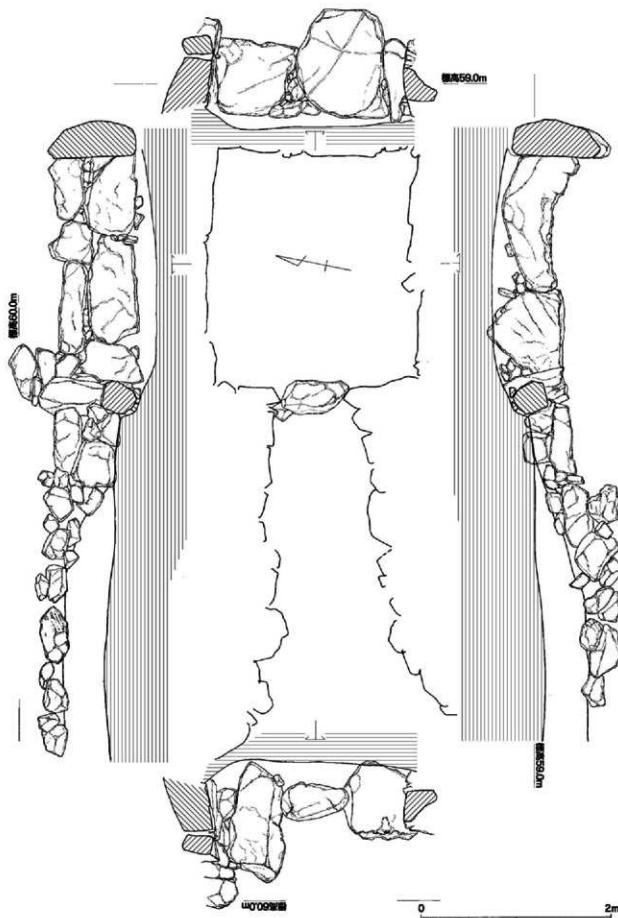


図14 16号墳石室実測図(縮尺1/40)

16号墳の石室

玄室床面は、石室基底面まで深く掘乱されており、敷石の有無は不明だが、側壁に遺存する鉄製品の痕跡から、敷面の敷石が敷設されていたものと推測される。

墓道

墓道は玄門部上半が遺存しないが、全長を確認することができたものと考えられる。床面には1箇所に櫛石が敷設される。櫛石は玄門部に位置し、奥壁からの距離238cmを測る。石材は、長さ70cm×高さ30cm程度の短い神状の石材1石を用いる。床面の敷石はない。

墓道左側壁は、玄門から105cmまでの石材が、また右側壁は79cmまでの石材が堅固に組まれており、この部分に天井石が構架されていたものと推測される。これより墓道側の石材は、小振りで石材が噛み合っておらず粗雑である。

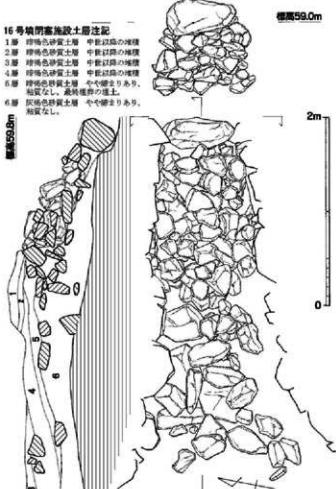


図 15 16号墳閉塞施設実測図(縮尺1/40)

石室基底面の状況

石室基底面は、周壁に沿って腰石の安定を図るために垂り込みが巡るものと考えられるが、玄室床面が大きく掘り下げられほとんど遺存しない。腰石と地山の間には、10~20cmの積石が少量配されている。

閉塞施設

墓道端部から墓道にかけて、閉塞施設が構築される。閉塞施設は、玄室側の閉塞石と、それより墓道側の埋土から構成される。閉塞石は、櫛石を櫛石とし、そこから長さ150cm程度の範囲に、長さ10~50cm程度の花崗岩転石を乱雑に積んでいるのみで、4~5段程度遺存している。背後の埋土は数層に分層できるが、上半は出土遺物から鎌倉時代以降の擾乱と考えられる。追葬の回数は確認できなかった。



図 16 16号墳閉塞施設検出状況(東から)



図 17 16号墳閉塞施設検出状況(南から俯瞰)



図 18 16号墳閉塞施設土層(南西から)

16号墳の石室



図19 16号墳石室全景（東から俯瞰）



図20 16号墳石室全景（狭道側から）



図21 16号墳石室掘方と石室（北から）



図22 16号墳石室玄門部（東から）



図23 16号墳石室奥壁（西から）



図24 16号墳石室左側壁（西から）



図25 16号墳石室右侧壁（北から）



図26 16号墳狭道左側壁（南西から）



図27 16号墳狭道右側壁（北東から）

(4) 出土遺物

出土状況 (図9、11~13)

内部主体が大きく破壊されており、石室内の出土遺物は皆無である。墳丘I区およびIV区から須恵器や土師器が発見された状態で出土した。

遺 物 (図28、29)

須 恵 器

坏 蓋 (1~14)

1は口径10.7cm、器高2.7cmの完形品。内面かえりはやや長く内傾し、口縁部より下方に延びる。天井部に浅い鉗状の摘みが付く。内器面の天井部に箋記号がある。2は口径12.3cm、器高3.8cm。口縁端部は丸く收める。天井部の約2/3に箋削りを施し、箋記号がある。3は口径12.8cm、器高4.2cm。口縁端部は丸く收める。段の名残りがある。天井部の約1/3に箋削りを施し、箋記号がある。4は口径13.0cm、器高4.0cmのほぼ完形品。口縁端部は丸く收める。天井部の約1/2に箋削り。5は口径14.5cm、器高4.3cmのほぼ完形品。口縁端部は丸く收める。天井部の約1/3に箋削り。6は口径13.0cm、器高3.7cm。口縁端部は丸く收める。天井部の約2/3に箋削りを施し、箋記号がある。7は口径14.2cm、器高4.0cmのほぼ完形品。口縁端部は丸く收める。天井部の約2/3に箋削り。8は口径14.6cm、器高4.7cmのほぼ完形品。口縁端部は丸く收める。天井部の約1/3に箋削り。9は口径15.1cm、器高4.0cm。口縁端部は丸く收める。天井部の約2/3に箋削り。10は口径15.1cm、器高4.4cm。口縁端部に明瞭な段がある。天井部の約2/3に箋削り。11は口径14.7cm、器高5.0cmのほぼ完形品。口縁端部に明瞭な段がある。天井部の約1/2に箋削り。12は口径15.8cm、器高5.3cm。口縁端部に段がある。天井部の約2/3に箋削り。13は口径15.6cm、器高5.1cm。口縁端部に明瞭な段がある。天井部の約2/3に箋削り。14は口径15.0cm、器高4.4cm。口縁端部に段がある。天井部の約1/2に箋削り。

坏 身 (15~29)

15は口径10.4cm、器高4.0cm、受部径12.4cm。立ち上がりは短く内傾。底部の約2/3に箋削りを施し、箋記号がある。16は口径10.6cm、器高3.6cm。

受部径12.4cm。立ち上がりは短くやや内傾気味。

底部の約1/3に箋削りを施し、箋記号がある。17は口径10.9cm、器高4.2cm、受部径13.0cm。立ち上がりは短く内傾する。底部の約1/3が箋削り、箋記号がある。18は口径6cm、器高3.8cm、受部径11.8cm。立ち上がりは短く内傾する。端部はやや器壁が厚く丸みを帯びる。底部の約2/3に箋削り。19は口径10.2cm、器高3.2cm、受部径12.4cmのほぼ完形品。立ち上がりは非常に短く内傾する。底部の約1/2に箋削り。20は口径11.3cm、器高4.5cm、受部径14.2cmのほぼ完形品。立ち上がりはやや長く内傾する。底部の約2/3に箋削り。21は口径12.2cm、器高4.4cm、受部径14.9cmのほぼ完形品。立ち上がりはやや短く内傾する。底部の約2/3に箋削り。22は口径12.7cm、器高4.6cm、受部径14.8cmのほぼ完形品。立ち上がりはやや長く内傾する。底部の約1/2に箋削り。23は口径13.0cm、器高4.7cm、受部径15.4cmのほぼ完形品。立ち上がりはやや長く内傾。底部の約2/3に箋削り。24は復元口径13.1cm、受部径15.4cm。立ち上がりはやや長く内傾する。受部は浅く短い。25は口径12.7cm、器高4.2cm、受部径15.5cmのほぼ完形品。立ち上がりはやや短く内傾する。底部の約2/3に箋削り。26は口径14.1cm、器高5.0cm、受部径16.6cmのほぼ完形品。立ち上がりはやや長く内傾する。底部の約2/3に箋削り。27は復元口径13.8cm、器高3.9cm、受部径15.7cm。立ち上がりは短く内傾する。底部の約1/2に箋削りを施し、箋記号がある。28は復元口径14.0cm、器高4.0cm、受部径16.2cm。立ち上がりはやや長く内傾する。底部の約2/3に箋削り。29は復元口径14.0cm、器高4.0cm、受部径16.6cm。立ち上がりはやや長く内傾する。底部の約1/2に箋削り。

題 (30~32)

30は残存高11.3cm、頸部径2.0cm、胴部最大径9.0cmを測る。頸部が非常に細く、口縁部は外反しながら立ち上がる。胴部は扁平な球形で肩部に2条の沈線が巡り、穿孔される。下半には回転箋削りを施す。31は残存高12.6cm、頸部径3.6cm、胴部最大径8.7cmを測る。頸部は外反しながら立ち上がり、口縁部には段が付く。頸部の中央には2条の沈線

16号墳の遺物

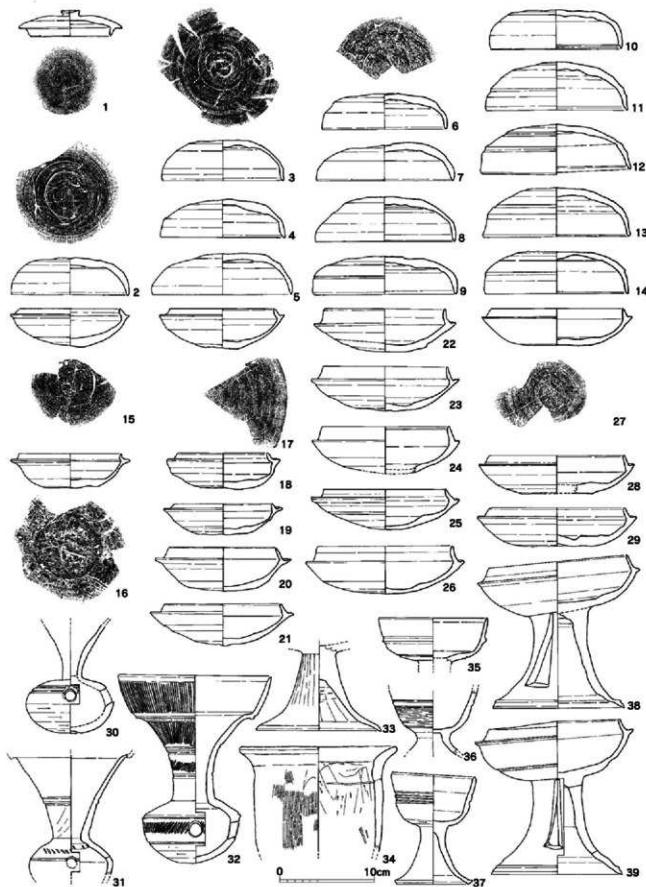


図28 16号墳出土遺物実測図その1 (縮尺1/4)

16号墳の遺物

を施す。肩部は扁平な球形と推測され、肩部に刺突文を施す。その下に1条の沈線が巡り穿孔される。32は器高19.8cm、口径16.0cm、頸部径4.1cm、胸部最大径10.1cmを測る。頸部は外反しながら立ち上がる。頸部と口縁部との境界には明確な段を有し、1条の突帯が巡る。口縁部は外反しながら立ち上がり、縱方向に籠状工具による沈線を施す。頸部は2条及び1条の沈線によって1/3ずつ分割され、上位には縱方向の籠状工具による沈線文、中位には刺突文を施す。胸部上半は笠状を呈し、下半と1条の沈線で区画される。下半にも1条の沈線文を施し、その間に刺突文を施し穿孔する。

高 坂 (35~39)

35は壺部片で口径11.4cm。体部中央に1条の突帯、その上下端に浅い沈線。下半に1条の沈線を施す。36は壺部～脚部片で、体部に2条の沈線、下半には刺毛目を施す。37は口径8.8cm、器高11.7cm、底径8.0cm。壺部中央に2条の沈線。脚部は喇叭状、端部が肥厚。38、39は有蓋高壺で脚部の3ヶ所に二等辺三角形の透かし。復元口径14.5cm、器高16.0cm、底径13.7cm。壺部立ち上がりはやや長く内傾、受部は浅い。脚部は喇叭状に開き、端部に段を有す。39は復元口径14.8cm、器高16.3cm、底径13.6cm。壺部立ち上がりはやや長く内傾。脚部は喇叭状、端部に不明瞭な段を有す。

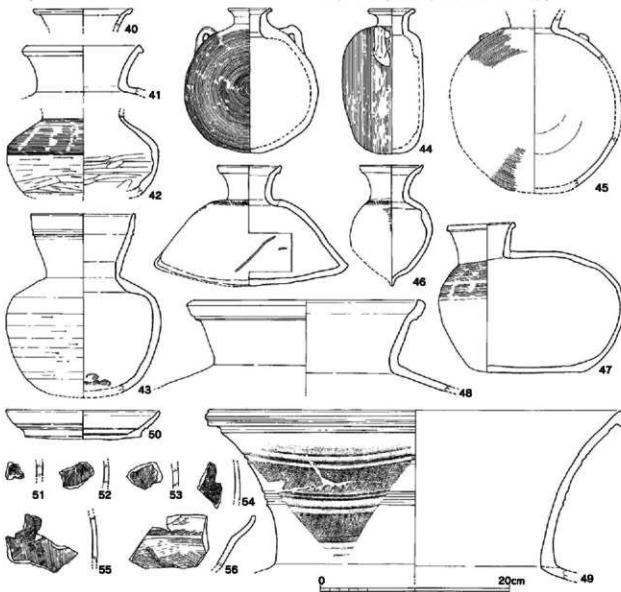


図29 16号墳出土遺物実測図その2 (縮尺1/4)

臺（40～43）

40、41は短頸壺の口縁部で、復元口径は頸に10.3cm、11.7cm。42は胴部片で、復元最大径15.8cm。40と同一個体の可能性がある。43は口径10.8cm、残存高18.7cm、胴部最大径16.2cm。頸部～口縁部は僅かに内傾しながら直線的に立ち上がり、上位に2条の沈線が巡る。胴部最大径は上位に求められる。外観面に自然釉が付着する。

提 瓶（44、45）

44は口径6.8cm、器高12.6cm、胴部最大幅20.2cm。口縁部は外反し、端部口縁部は短く外反し、端部が外方に突出する。肩部には環状の双耳が付く。胴部にはカキ目と鎧削りを施す。45は胴部片で、肩部に鉢状の双耳が付く。

皮袋形土器（46）

46は口径4.4cm、器高15.1cm、胴部径14.0cm。口縁部は短く外反し端部は肥厚する。胴部上端の頸部外周と、胴部上位の綴じ目に刺突文を施す。胴部下端は指掘で押さえ綴じ目を表現。胎土は概ね精良で、色調は灰色。胴部に範記号が見られる。

平 瓶（47）

47は口径6.9cm、器高15.7cm、胴部最大幅19.4cm。口縁部は外反し、端部は肥厚する。胴部上半にカキ目、口縁部は短く外反し、端部が肥厚する。肩部には環状の双耳が付く。胴部にカキ目と鎧削り、45は胴部片で、肩部に鉢状の双耳が付く。

臺（48、49）

48は復元口径23.6cm、49は復元口径43.4cm。

土 師 器**萬 坯（33）**

33は脚部片で、底径17.0cmに復元される。

罋 鉢（34）

34は口径16.4cm。口縁部は短く外反。胴部外器面に縦方向の刷毛目。内器面に粗い削りを施す。

土師器坏（50）

50は底部糸切りの坏で、復元口径16.0cm。

土 鍋（51～56）

いずれも同一個体片。使用痕がなく、内器面に墨書きがある。「晩間」と読めるものもあり、内容は漢詩等の可能性が高いと推測される。

3.まとめ

最後に、調査で得られた羽根戸古墳群N-16号墳のいくつかの特徴について所見を述べて、まとめて代える。

まず、N-16号墳の墳丘規模は、石室の中心から墳頂までの距離を反転して、直径17.0m程度の円墳と推定される。段築は確認されなかった。この規模は、調査地点から西へ約250m離れたN-8号墳（直徑20m・調査後現状保存）に次ぐ規模と推定され、調査着手前の予想を大きく超えるものであった。調査前には、墳丘が重機によって無断で大きく破壊されていたものの、墳丘の盛土内部には外護列石が確認された。

石室の構造は、両袖式單室の横穴式石室で、玄室奥幅204cm、玄室長238cmを測る正方形に近い長方形平面を呈する。羨道が非常に長く、石室全長は、右が602cm、左が646cmを測る。羨道部分の石材の大きさから、この部分での天井石は、玄門付近のみに構築されたものと考えられる。使用された石材は花崗岩であるが、羨道端部付近の左右側壁に、玄武岩が各1個用いられており、右側壁のものは、その背後から検出された墳丘IV区盛土内の外護列石に連接していた。この目印的な石材の使用は、石室構築と同時に進められた墳丘盛土の工程と深く関わるものと考えられる。また、これら玄武岩よりも前面側の羨道部分石材は、組まれているというよりも、むしろ墳丘盛土の土留め程度に置かれているという感が強い。

石室内は大きく擾乱されており、出土遺物が皆無であったが、墳丘前面からは供獻された須恵器や土師器が多く出土した。特筆すべき遺物としては、施文の退化した皮袋形須恵器が1点出土している。出土した須恵器には、6世紀後半から7世紀代にかけての時期幅があるものと考えられる。16号墳の築造年代は、概ね6世紀後半代と推定されるが、石室の平面形がやや正方形に近く、奥壁腰石に2石を使用しており、また開口方向が丘陵の上側に向かっていること等、古い様相が觀察され、6世紀後半でも古い段階と推測される。

第4章 第10次調査の記録

1. 調査の概要

第10次調査地点は、福岡市西区大字羽根戸字大原733番1に位置する。羽根戸古墳群N群のうち、20号墳及び21号墳の円墳2基の調査である。羽根戸古墳群N群は、飯盛山から北東側に派生する丘陵斜面上に立地し、標高は約56~59mを測る。調査前の現況は竹林で、20号墳の南半は道路の開削で削平されており、また北側は擁壁工事により破壊されていた。21号墳の遺存状況は、20号墳と比べると良好であった。

調査は現況測量の後、主体部を掘り下げ、その主軸に沿って墳丘の規模と構造を把握するため1ないし3本のトレンチを設定・掘削した。トレンチの土層観察に従い表土や周溝の堆積等を除去し、墳丘の遺存状況、墳丘の供獻遺物の出土状況、外縁列石、地山盤形面、石室掘方、石室基底面まで調査・記録した。

2. 20号墳

(1) 位置と現況 (図30~33)

羽根戸古墳群N-20号墳は、支群のやや東寄りに位置しており、現況の墳丘最高所で標高59.30mを測った。周辺にはN-16、19、21、22号墳が隣接しており、それぞれ約18~25m程度離れている。尾根の頂部付近を東西に走る道路の開削によって墳丘が大きく破壊されており、地形の確認が困難であるが、20号墳と北西側に隣接する16号墳が尾根の頂部付近を占地しているものと考えられる。

(2) 墳丘 (図35~43)

地山盤形

墳丘の築造に伴う地山盤形は、丘陵の北西側から墳丘の後背部を経由して南側に至る馬蹄形溝の掘削と、墳丘の前面すなわち西側及び南側の墳裾の削り出し、及び墳丘基底面の整形と石室掘方が

らなるものと考えられる。このうち墳丘の南半と北側の墳裾部は、道路の開削により調査以前に既に失われており、状況は全く不明である。

墳丘の東半部で検出された馬蹄形溝は、やや不整形な環状を呈し、遺存する部分での最大幅で約7mを測る。断面は非常に浅く、墳丘の基底面から馬蹄形溝の底部までの深さは、最大約1mを測る。馬蹄形溝底部の標高は、最も低い箇所で標高57.2m付近であり、ちょうど石室の後背部付近に位置する。馬蹄形溝は、この位置から北側及び南側の墳裾部分に向かって緩やかに立ち上がり、馬蹄形溝から西側にかけては、そのまま墳裾及び墓道に連接していたものと推測されるが、既に破壊されており状況は不明である。

墳丘基底面の整形は、ほぼ全面で古墳築造以前の旧表土層（有機質富食土層）を検出したことから、丘陵の旧地形をそのまま利用したものと推測される。遺存する部分での墳丘基底面の標高は、57.75m~58.3mを測り、西から東に向かって緩やかに傾斜している。

石室掘方

石室掘方は、尾根筋の斜面等高線に対して概ね平行に掘削されていると考えられる。平面形は隅丸長方形を呈すると考えられるが、前半部が大きく削平されており、全体の規模と形状は不明である。幅は最大2.9mを測り、長さは3.3mが遺存する。墳丘基底面からの掘削深度は非常に浅く、0.2m程度である。

盛土

盛土は、石室の構築過程と並行して行われたと考えられるが、墳丘が大きく破壊されほとんど遺存していない。盛土の工程は、石室の裏込めのものと、墳丘基底面より上部の盛土に大別されるが、石室掘方が非常に浅いため、そのほとんどは後者である。

使用される土砂は、地山（黄褐色花崗岩パイラン）由来の黄褐色砂質土や暗褐色砂質土を主成

20号墳の墳丘・石室

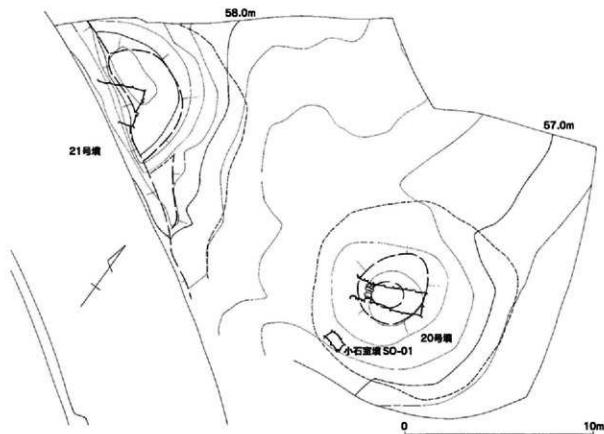


図30 10次調査地点現況測量図（縮尺1/200）



図31 10次調査地点調査前現況（南西から）



図32 20号墳調査前現況（南東から）



図33 20号墳調査前現況（北東から）



図34 21号墳調査前現況（北西から）

20号墳の墳丘・石室

とし、細礫や礫を混入している。10~50cmの厚さに分層したが、竹の根による侵蝕のため特に上方は細分することができなかった。しかしⅡ区墳丘で確認された外護列石の状況から、元来は丁寧な版築状に盛土されたと推定される。盛土の厚さは、墳丘基底面から最大1.0m程度遺存している。

外護列石は、墳丘Ⅱ区を中心確認された。この外護列石は、墳丘盛土内の埋め殺し的なもので、

少なくとも2~3工程が確認できた。図に掲載した第2面、第3面の列石は、一部重複している。

Ⅱ区の外護列石は、盛土を被覆するように敷設されており、石室の中心付近から半径2~5m付近を環状に巡っている。使用される石材は、全て10~100cm程度の花崗岩板石である。

墳丘規模は、石室中心付近から墳頂間の距離を反転して直径15.0m程度の円墳と推定される。



図35 20号墳墳丘遺存状況（西から）



図36 20号墳地山整形（北から）

20号墳の墳丘・石室

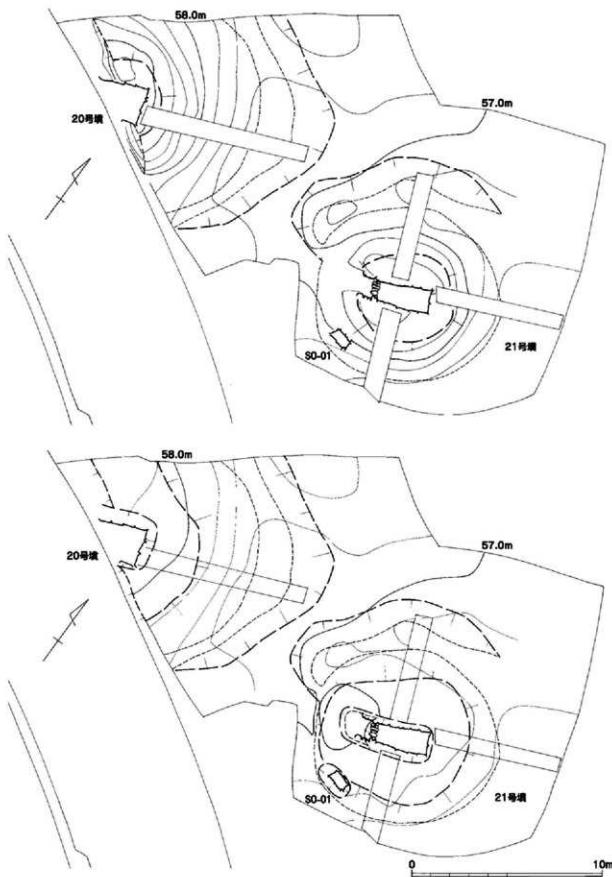


図37 20、21号墳墳丘遺存状況図及び地山整形測量図（縮尺1/200）

20号墳の墳丘・外護列石

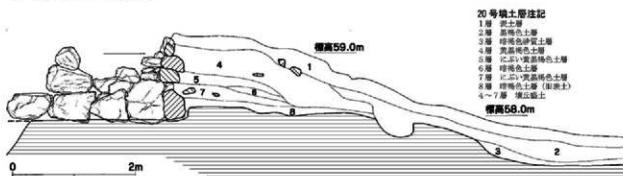


図38 20号墳墳丘断面図 (縮尺1/60)



図39 20号墳墳丘断面 (南から)

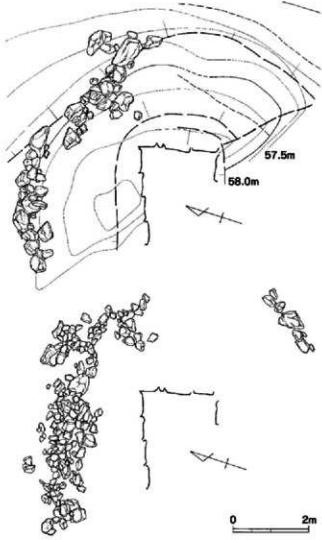


図40 20号墳外護列石実測図 (縮尺1/100)



図41 20号墳外護列石検出状況 (北から)



図42 20号墳外護列石第2面検出状況 (北から)



図43 20号墳外護列石第3面検出状況 (北から)

20号墳の石室

(3) 内部主体 (図44~47)

20号墳の内部主体は、西側に向かって開口する横穴式石室である。玄室主軸はN-72.0°-Eを測る。石室は前半が完全に破壊されているほか、上半も遺存しておらず、構造や規模について不明な部分が多い。

玄 室

玄室規模は、奥幅196cmを測り、右側壁は72cm、左側壁は258cmが遺存する。平面形は長方形を呈すると考えられる。使用される石材は、全て花崗岩帳石と割石である。

奥壁は3石を用いて腰石とし、両側壁を挟んで

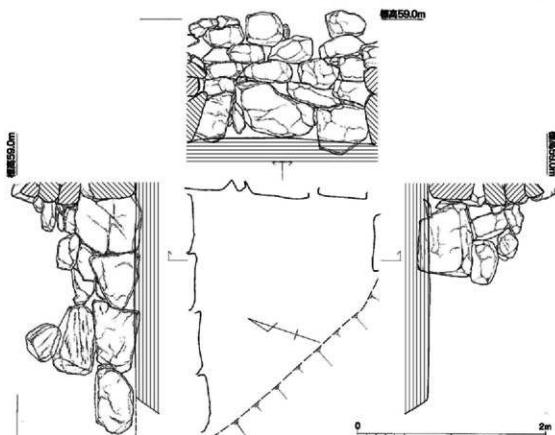


図44 20号墳石室実測図 (縮尺1/40)



図45 20号墳石室全景 (東から俯瞰)



図46 20号墳石室奥壁 (西から)

図47 20号墳石室左側壁 (南から)

いる。腰石の大きさは、高さ50cm×幅50~90cm×厚さ40cm程度を測り、横位に立てて使用している。中央の石材がやや大振りで、天端での目路が揃っておらず、小振りな石材を据えて標高58.4m付近で目路を通してている。腰石より上は4~5段が遺存し、2段目以上に使用され石材は、長さが30~50cmと小振りで、横方向に据えて使用している。横方向に目路があり、間隙に小礫や紫灰色粘土を充填して目詰めを行う部分も観察された。奥壁の中央部付近は、石材間がやや離れた状態になっているが、これは石室破壊時に構造が不安定になつたためと考えられる。

左側壁は、4石の腰石が遺存しているが、元來の個数は不明である。使用される石材は、長さ60~80cm×高さ40~70cmを測り、奥壁際の石材が最も大きい。横方向に目路を通す意図が看守されるが、2段目以上の遺存状況は良好でない。

右側壁は、腰石1石とその上の石材がごく一部遺存するのみである。腰石は長さ80cm×高さ50cmを測る。上位の石材は小振りである。

玄室床面は、石室基底面まで深く搅乱されており、敷石の有無は不明である。床面付近には地山内の風化していない花崗岩が露出していたが、敷石の一部を兼ねていた可能性も考えられる。

石室基底面の状況

石室基底面は、周壁に沿って腰石の安定を図るために掘り込みが遺るものと考えられるが、玄室床面が大きく掘り下げられはほとんど遺存しない。根石は確認されなかった。

(4) 出土遺物（図61）

出土状況

内部主体は大きく破壊されており、石室内から遺物が全く出土しなかった。墳丘Ⅲ区から鉄刀片1点が出土したのみで、須恵器等の土器類も皆無である。

遺 物

鉄 刀 (22)

22は残存長34.1cm、刀身幅4.0cm、刀身厚0.9cmを測る。内部のメタルが遺存している。

3. 21号墳

(1) 位置と現況（図30、34）

21号墳は20号墳の東側に位置し、現況の最高所で標高57.8mを測る。20号墳とは石室の中心間で約18m離れている。また、21号墳の南側には22号墳が位置し、約10m離れている。

(2) 墳 丘（図37、48~52）

地山整形

地山整形以前の丘陵は、北西側から尾根筋が延びていたものと考えられる。よって墳丘の築造に伴う地山整形は、北西側から東側へ延びる馬蹄形溝の掘削と、それ以外の箇所の墳丘の削り出し、及び墳丘基底面の整形と石室掘方からなるものと考えられる。

墳丘の北西側から北側で検出された馬蹄形溝は、やや不整形な環状を呈し、最大幅約4.5mを測る。断面は非常に浅く、墳丘基底面から馬蹄形溝底部までの深さは、最大約0.3mを測る。馬蹄形溝底部の標高は、最も低い箇所で標高56.75m付近である。馬蹄形溝は、東から西に向かい緩やかに立ち上がる。馬蹄形溝の西端部は、墓道に連接している。また東端部は、墳丘の東側から南半部で削り出された墳頂に繋がり墓道に連接している。

墳丘基底面の整形は、そのほぼ全面で古墳築造以前の旧表土層（有機質腐食土層）を検出したことから、丘陵の旧地形をそのまま利用したものと推測される。遺存する部分での墳丘基底面の標高は、56.4m~56.9mを測り、北西側から南東側に向かって緩やかに傾斜している。

石室掘方

石室掘方は、尾根筋の斜面等高線に対して概ね平行に掘削されていると考えられる。掘削面での平面形は、長さ5.0m×幅2.0mの隅丸長方形を呈する。墳丘基底面からの掘削深度は非常に浅く、東側で0.4m、西側で0.2mに満たない。基底部の構造は2段に分かれる。葬部は長さ1.3m程度の舌状のテラスを造り、玄室部にかけて段が付く。玄室部分は1段下がり、平坦である。

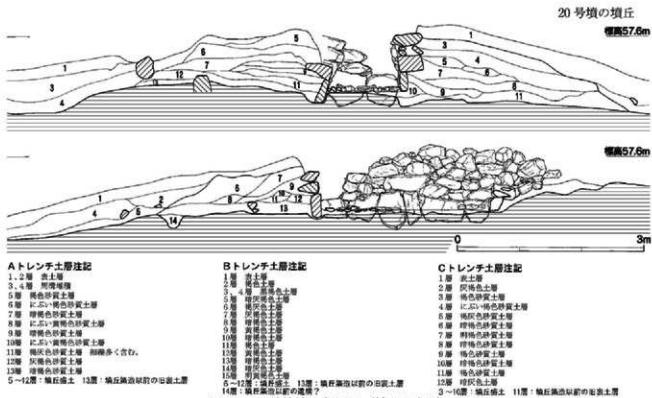


図48 21号墳墳丘断面図(縮尺1/60)



図 49 21号堆積丘断面（西から）



図50 21号埴埴丘断面（北から）



図 51 21 号墳墳丘遺存状況（北から）

図 52 21号墳地山整形（西から）

盛 土

盛土は、石室の構築過程と並行して行われたと考えられるが、石室及び墳丘の破壊によって大部分が失われている。盛土の工程は、石室の裏込的なものと、墳丘基底面より上部の盛土に大別されるが、石室掘りが非常に浅いため、そのほとんどは後者である。使用される土砂は、地山（黄褐色花崗岩バイラン土）由來の黄褐色砂質土や灰褐色砂質土を主成とし、細繊維が多く混入している。10~50cmの厚さに分層したが、竹の根による侵蝕のため細分することができなかつた。盛土の厚さは、墳丘基底面から最大0.8m程度遺存している。外護列石は確認されなかつた。

また、墳丘Ⅲ区の盛土（Cトレンチ8層・暗褐色砂質土解）内から須恵器灰蓋片（1）が1点出土した。周辺には炭化物の小片が散在していることから、墳丘構築時に行われた祭祀に伴う遺物である可能性も考えられるが、調査時には明確にすることができなかつた。

N-21号墳は、遺存する馬蹄形構と墳帽間の距離から直径10mを測る円墳である。

(3) 内部主体（図53~58）

21号墳の内部主体は、西側の丘陵上方に向かって開口する両袖式竪穴系横口式石室である。玄室主軸はN-69.5°-Eを測る。石室は上半部が大きく被覆され、遺存状況はあまり良好でない。

玄 室

玄室規模は、奥幅126cm、前幅93cm、右側壁長270cm、左側壁長274cmを測る狭長な羽子板形平面を呈する。使用される石材は、すべて花崗岩転石と割石である。

奥壁は2石を縦位に立てて腰石としている。両石も大きさはほぼ同じである。向かって右側の石材は高さ50cm×幅50cm×厚さ15cm、左側の石材は高さ55cm×幅60cm×厚さ15cmの扁平な石材を使用している。地山の根入れは非常に深く、安定を図っているものと考えられる。2段目以上の石材はほとんど抜き取られており、左側の石材が3段目まで遺存する。大きさは幅40~50cm×高さ20cm

前後の扁平な石材であり、いずれも横位に据えている。間隙には小礫を充填しており、腰石は両側壁から挿まれている。

左側壁は、6石を腰石としている。奥壁側の石材が最も大きく、高さ60cm×幅50cmの石材を縦位に立てて使用している。奥壁から4番目の腰石は、高さ60cm×幅20cmの棒状を呈する石材を縦位に立てて使用しており、他の腰石と据え方が異なっている。他の腰石は、高さ30~50cm×幅45~55cmの石材を縦位に立てて使用している。各腰石は、奥壁同様に根入れが深い。腰石の天端は目地が描っていないが、概ね平坦面を上方に向いている。2段目以上の石材は、腰石程度の大きさのものも数個確認されるが、20cm程度の非常に小振りな石材が多く用いられている。奥壁側の石材天端と、他部分の2段目石材天端が概ね目地を描いている。3段目以上の石材はほとんど抜き取られているが、使用される石材も同様で、横方向に据えて使用している。一部4段目までが遺存している。また、奥壁側隅角の石材は、斜め方向に据えられている。

右側壁は、6石を腰石としている。左側壁とは異なり、奥壁側の石材は高さ30cm×幅40cmを測り、腰石中もっとも小振りである。最大の石材は奥壁から5番目の石材であり、高さ40cm×幅70cmを測る。また、奥壁から4番目の石材は、左側壁と同様高さ50cm×幅25cmの棒状の石材を縦位に立てて使用している。各石材は平坦面を上方に向けており、腰石の天端は緩やかな弧を描きながら目地が通っている。2段目以上の石材は、左側壁と同様、腰石程度の大きさのものも数個確認されるが、ほとんどが高さ20cm×幅20~40cm程度の非常に小振りな石材である。4ないし5段目までが遺存しており、横方向に目地が描えられている。

横口部は玄室床面から高さ約45cmの部分を開口部としている。下部は2ないし3段に石材を積んで前壁を構築している。腰石には幅40~50cm×高さ20cmの2石を使用し、横方向に目地が通っている。上部に使用される石材は、幅20~30cm×高さ20cm×長さ30~40cm程度の小振りな転石が多い。前壁は垂直でなく僅かに傾斜がある。最も上部は、

21号墳の石室

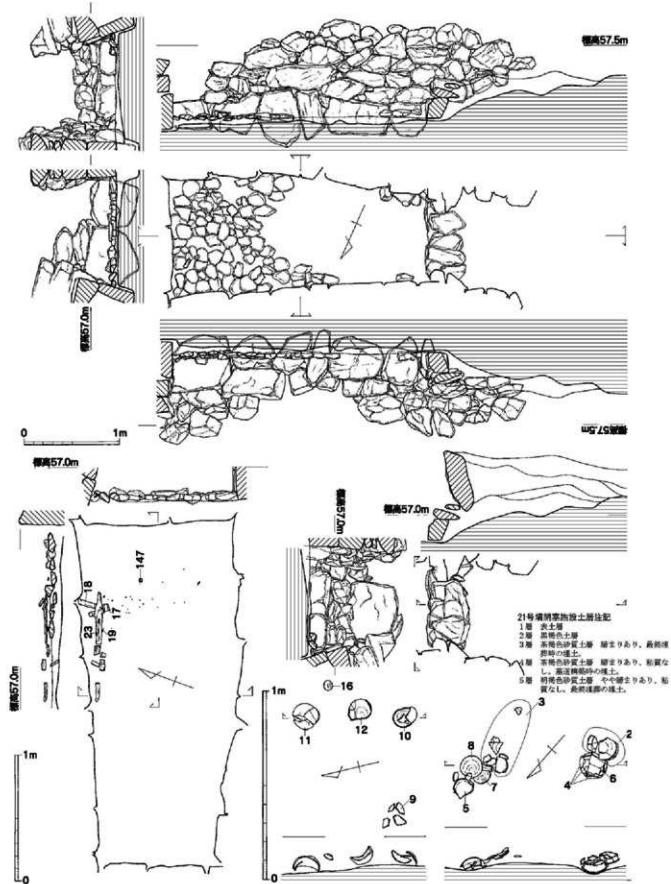


図 53 21号墳石室、閉塞施設、遺物出土状況実測図 (縮尺 1/40, 1/30, 1/20)

21号墳の遺物



図 54 21号墳石室全景（西から）



図 55 21号墳石室床面（東から）



図 56 21号墳石室遺物出土状況（南から）



図 57 21号墳閉塞施設検出状況（南から俯瞰）



図 58 21号墳閉塞施設検出状況（東から）

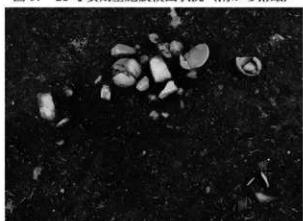


図 59 21号墳I区埴丘A群遺物出土状況（西から）



図 60 21号墳I区埴丘B群遺物出土状況（北西から）

石室の主軸方向と平行に軸石が4個並べられている。また、横口部での地山掘方は緩やかな傾斜をもち、その上に地山由来の明褐色砂質土を版築状に叩き締めて石材を安定させ、狭道部を構築している。

玄門部は両袖で、小振りな石材を玄室主軸と直行方向に横位に置いて使用している。袖石は両側壁のそれぞれ2段目の石材と目地の高さが揃えられている。

玄室床面には、長さ10~30cmの花崗岩礫で敷石が敷設されている。敷石は1面を確認した。遺存状況から、元来は玄室の全面に敷設されていたものと推定されるが、奥壁側の1/3程度が遺存するのみであり、玄室前半は大きく被覆され、掘削は石室基底面にまで及んでいた。また、石室基底面と敷石との間には、地山由來の茶褐色砂質土が厚さ5cm程度盛られていた。

義道

非常に短い狭道が接続する。狭道長は、左腰が90cm、右壁が86cmを測る。それぞれ4石を腰石とし、地山を掘り込んで石材の安定を図っている。また、腰石は地山の傾斜に合わせて斜めに据えられているものが多い。狭道部の石材は、幅20cm~45cm×高さ10~30cmの非常に小振りなものを使用し、高さは約50~70cmが遺存している。また目地を揃える意図が看守されず、積み方がやや乱雑であることから、狭道部には天井石が構築されていなかったものと推測される。

石室基底面の状況

石室基底面の構造を知るために、敷石、埋土を完全に除去して観察を行った。腰石の周壁に沿って、腰石を安定させるための掘り込みが巡らされる。また、腰石を完全に除去したが、根石は確認されなかつた。腰石と地山の間には、10~20cmの根石が少量配されている。

閉塞施設

狭道部には閉塞施設が構築されている。閉塞施設は、玄室側の閉塞石とそれより墓道側の埋土から構成される。閉塞石は、玄室前壁を根石とし、高さ60cm×幅50cm×厚さ20cmを測る板状の花崗岩

軸石を立てている。板石の上部には花崗岩軸石が僅かに遺存するが、大半が失われており構造は明確でない。板石の背面には、埋葬後に充填された茶褐色砂質土が厚さ30cm程度遺存している。

狭道部分の土層断面の観察から、21号墳では初葬を含めて少なくとも2回の埋葬があったものと考えられる。

(4) 出土遺物

出土状況 (図53、59、60)

石室内部は、床面の前半部が大きく破壊されていたものの、奥壁側は攪乱を免れており、敷石の上から、鉄器や装身具類が埋葬された状態で出土した。鉄器類には武器（鍔刀、鐵鎌）、農工具（鍔、鐵鎌、刀子、鐮子）がある。鍔刀(23)は、玄室後半部の左側壁に沿って剛葬されており、墓部を奥壁側に、切先を前壁側に向けていた。墓端部は奥壁から35cmを測り、切先は左側壁の中央付近に位置する。刃部は玄室内側に向かっていた。刃身は折れて破片が部分的に原位置を留めていたのか、これは攪乱時もしくは追葬の段階で動いたものと推定される。また、墓部の上には鉄鎌(17)と鐮子(19)が、下方には鉄斧(18)が副葬されていた。装身具類（耳環、ガラス製玉類）は、奥壁から20cm程度離れた敷石上に散乱した状態で出土した。耳環は1点しか出土していない。散乱して出土したガラス製玉類の状態から、輪飾り等を引きちぎる葬送儀礼が想起される。

このほか、石室内部の攪乱された埋土内から土削器の壺などが出土した。また、床面直上の埋土を水洗し、ガラス製玉類を数10個検出した。

墳丘I区の墳頂からは、須恵器や土師器、土製紡錘車が供獻された状態で出土した。墓道に近いA群は須恵器の壺（身、蓋）を主体とし、B群は土師器鉢を主体とし、このほか紡錘車が1点出土した。

なお、墳丘の盛土内から須恵器壺蓋(1)が1点出土している。出土状況やその性格等については2項で詳述している。

遺 物 (図61、62)

須 恵 器

壺(身、蓋)が出土している。

壺 蓋 (1~4)

1は口径11.8cm、器高4.5cmに復元される小片である。口縁部には明瞭な段が付き、端部はやや外反する。体部のほぼ中央には1条の沈線が巡る。口縁部と天井部との境界には1条の凸線が巡り、明確に区画される。天井部には2/3に回転範削りを施す。胎土は概ね精良で、細砂が僅かに含まれる。色調は黄みの明灰色を呈する。2は口径12.8cm、器高5.0cmを測る。口縁部には明瞭な段が付き、端部は僅かに外反する。口縁部と天井部との境界には1条の凸線が巡り、明確に区画される。天井部には2/3に回転範削りを施す。胎土は概ね精良で、細砂が僅かに含まれる。色調は黄みの明灰色を呈する。3は口径12.8cm、器高5.0cmを測る。口縁部には明瞭な段が付き、端部は僅かに外反する。口縁部と天井部との境界には1条の凸線が巡り、明確に区画される。天井部には2/3に回転範削りを施す。胎土は概ね精良で、細砂が少量含まれる。色調は黄みの明灰色を呈する。4は口径13.3cm、器高4.8cmを測る。口縁部には明瞭な段が付き、端部は僅かに外反する。口縁部と天井部との境界には1条の高い凸線が巡り、明確に区画される。天井部には2/3に回転範削りを施す。胎土は概ね精良で、色調は明灰色を呈する。

壺 身 (5~8)

5は口径10.2cm、器高4.7cm、受部径12.2cmを測る。立ち上がりは長く内傾し、口縁部には明瞭な段が付く。底部には2/3に回転範削りを施す。胎土は精良で、色調は明灰色を呈する。6は口径10.0cm、器高5.2cm、受部径13.1cmを測る完形品である。立ち上がりは長く内傾し、口縁部には明瞭な段が付く。底部には2/3に回転範削りを施す。胎土はやや粗く粗砂を含む。色調は明灰色を呈する。7は口径10.4cm、器高5.4cm、受部径12.6cmを測るほぼ完形品である。立ち上がりは長く内傾し、口縁部には明瞭な段が付く。底部には2/3に回転範削りを施す。胎土はやや粗く粗砂を含む。色調は明灰色を呈する。8は

口径10.0cm、器高4.2cm、受部径12.2cmを測る完形品である。立ち上がりは長く内傾し、口縁部には明瞭な段が付く。底部には2/3に回転範削りを施す。蓋記号が見られる。胎土はやや粗く粗砂を含む。色調は明灰色を呈す。

土 師 器

鉢、甕、高壺片が出土している。器種が少ない。鉢 (9~12)

9は口径14.6cm、器高4.9cmに復元される。口縁部は内湾しながら上方へ立ち上がり、端部は丸く收める。外気面底面には範削りを施す。胎土は概ね精良で、色調は明橙褐色を呈する。10は口径12.1cm、器高4.9cm、体部最大径12.9cmを測る。口縁部は内湾し、端部は概ね丸く收める。胎土は概ね精良で、色調は明橙褐色を呈する。11は口径12.3cm、器高6.0cm、体部最大径13.0cmを測る。体部はやや深く、口縁部は内湾し、端部は概ね丸く收める。底部には範削りを施した後、ナデ調整する。胎土は概ね精良で、色調は赤みの橙褐色を呈する。12は口径12.2cm、器高7.0cm、体部最大径13.2cmを測る。体部は深く、口縁部は内湾し、端部は概ね丸く收める。底部にはナデ調整がみられる。胎土は概ね精良で、色調は赤みの橙褐色を呈する。

甕 (13、14)

13は石室が被襲された際の埋土から出土した。口径16.0cm、胴部最大径17.7cmに復元される。口縁部は外反し、横ナデを施す。胴部内側面には粗い範削りを施し、器壁を薄くしている。外器面には縱方向の刷毛目を施したのち、ナデ調整を施す。胎土は概ね精良で、色調は黄みの橙褐色を呈する。14は口縁部の小片で口径24.0cmに復元される。口縁部は横ナデを施し、短く外反する。口縁部には横ナデを施す。胎土は精良で、色調は薄い黄みの橙褐色を呈する。

高 壺 (15)

15は、口径29.2cmに復元される壺部片である。下半部は直線的に延び、口縁部は朝顔状に外反する。内・外器面ともに縱方向の刷毛目を施す。胎土はやや粗く、粗砂を少量含む。色調は明るい橙褐色を呈す。

20・21号墳の遺物

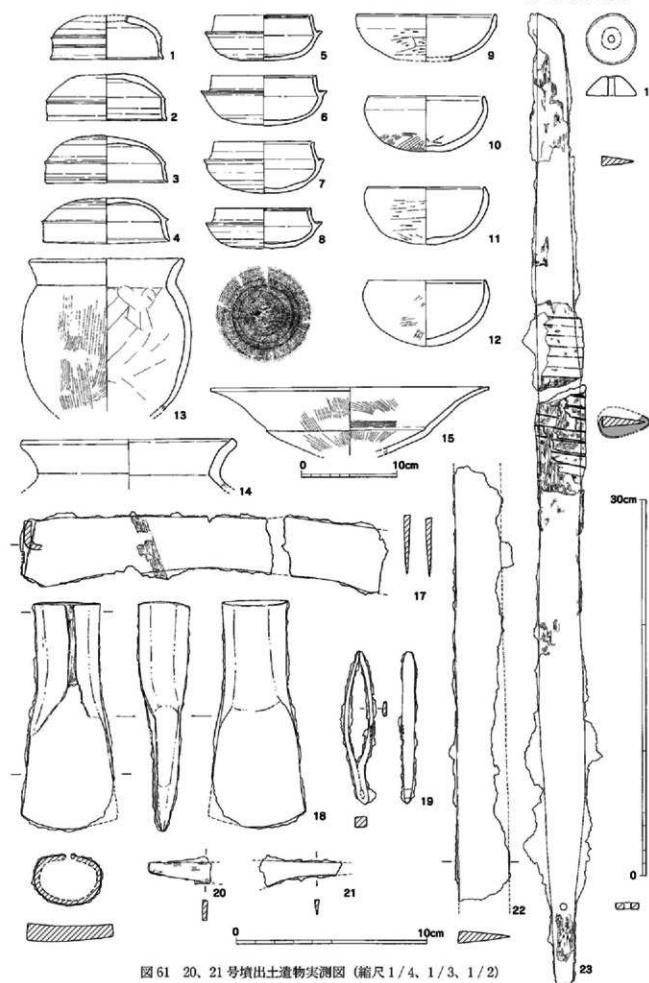


図61 20、21号墳出土遺物実測図（縮尺1/4、1/3、1/2）

20・21号墳の遺物

紡錘車 (16)

16は直径5.2cm、器高2.1cmを測る土製紡錘車の完形品である。上面の直徑が小さく、断面が台形状を呈する。中央に棒状の工具を通し、整形後に抜き取った径0.7cmの孔がある。胎土は概ね精良で、色調は灰色を呈している。

鉄器

武器

鉄刀および鉄鎌片が数個出土した。鉄鎌は小片であるため図化していない。

鉄刀 (23)

23は残存長7.1cm、刀身幅3.5cm、刀厚0.9cm、茎部尻幅1.4cm、茎部厚0.5cmを測る。刀身の一部が欠損するが、元来の長さは残存長と大差ないものと推定される。茎部の形状は栗尻で、径0.5cmの目釘穴が先端から約6cmのところに1箇所打たれる。刃部は鋒が付着しており、現在のところ形状を観察できない。切先はフクラ切先である。刀身には木製の鞘が部分的に遺存し、断面の形状は、下端部が尖り氣味の倒卵形を呈するものと考えられる。また稍木質の表面には、幅0.7~0.9cmを測る粗紐が一直に巻かれている。粗紐の素材は、糸と推定される。

農工具

鉄鎌 (17)

曲刀鍔で、2片が出土した。接合しないが同一個体と考えられる。両片を合わせた残存長は18.5cm、厚さは0.3cmを測る。着柄角度はほぼ直角で、刃身部に木質が部分的に付着している。

鉄斧 (18)

18は全長11.9cm、刃部長5.9cm、同幅4.6cmを測る。袋部断面は長径3.5cm、短径2.6cmを測る梯円形を呈する。肩部は撫肩で、合わせ目の仕上げは概ね丁寧である。刃部は楔形を呈する。

鏡子 (19)

19は、全長8.0cmを測る鏡子と呼称されるビンセット状の工具で、完形品である。幅0.7cmの薄い銅板を折り曲げ、基部を環状に仕上げる。基部端部は素材の銅板幅より小さく厚いことから、整形の過程で叩打されているものと考えられる。また先端部は爪状にやや尖り気味である。表面に纖維痕と、ハエの團扇殻が數固体肉眼観察される。

刀子 (20、21)

20は刀子の茎部片で、残存長3.3cm、茎元幅0.5cm、同厚0.2cmを測る。茎部は一文字尻で、全体に木質の痕跡が僅かに確認される。21は刃部片で、残存長4.3cm、刃厚0.2cmを測る。

装身具類

ガラス製玉類

粟玉 (26~30)

いずれも引き延ばし技法で製作され、色調は紺青色~緑色を呈する。

小玉 (24、25、31~146)

24、25は被片。製作技法及び色調は、粟玉と同様である。最大のもので直径0.7cmを測る。

耳環 (147)

147は直径2.05cmを測る耳環の銅芯部である。表面は磨食が進行している。

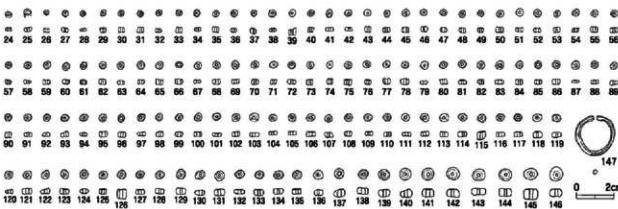


図62 21号墳出土装身具実測図(縮尺1/2)

SO-01 の墳丘・石室

4. 小石室墳 SO-01

(1) 位置と現況

小石室墳 SO-01は、21号墳IV区墳丘の墳被付近で検出された。21号墳は石室の中心間で約4m離れている。また、21号墳の南側には、22号墳が位置しており、約6m離れている。

(2) 墳丘

SO-01は21号墳の墳丘に完全に取り込まれておらず、21号墳の墳丘盛土上面から石室掘方を掘削している。石室構築の際には、石材の構架や石室の被覆のために盛土され、墳丘を構築したものと推測されるが、完全に流出していた。また、馬蹄形溝や掘削も確認されなかった。

石室掘方

石室掘方は、尾根筋の斜面等高線に対して垂直に近い角度をとるものと推定されるが、尾根筋を意識して掘方を行ったというよりは、21号墳墳丘の等高線に大きく左右されているものと考えられる。石室掘方の端部は、21号墳のIV区墳被とほぼ一致しており、標高56.5m～56.75mの等高線にはば並行に掘削されている。

石材の裏込めには、21号墳の墳丘盛土と同様の暗褐色砂質土が使用されている。

(3) 内部主体

SO-01の内部主体は堅穴式石室で、玄室主軸はN-77.5°-Wを測る。天井部が失われ、腰石及び2段目の石材の一部が遺存するのみである。遺存する石材は、全て花崗岩である。東西の小口の腰石

には、長さ50cm×高さ35～50cm程度の石材を横方に立てて使用している。南北の側壁はそれぞれ2石を用いて腰石としており、石材の規格は小口に用いられる石材と大差がない。小口と側壁の天端は、横方向に目地が嵌められている。2段目以上の石材には、幅20～40cm×高さ10～15cm程度の小振りなものを使用し、小口を石室部に向けて積んでいる。21号墳墳丘の流出に合わせて東側および南側の2段目以上の石材が遺存していない。

床面には敷石状の石材が1石検出されたが、遺物の出土状況から敷石は元来敷設されておらず、地山が直接床面となるものと推定される。

石室基底面の状況

石室基底面には、腰石に沿ってその安定を図るたる僅かな掘り込みが巡っている。石材の積え積みは確認されなかった。

(4) 出土遺物 (図63)

出土状況

石室内から、副葬品の土師器鉢が1点出土した。このほかの副葬品及び供遺物はない。

出土遺物

土 师 器

鉢 (148)

148は口径13.0cm、器高5.3cm、体部最大径13.4cmを測る完形品である。体部は内湾し、口縁部はほぼ上方へ立ち上がる。口縁端部は丸く收める。外気面には荒磨きが施される。胎土は概ね精良で、白色細砂を含む。色調は明橙褐色を呈する。

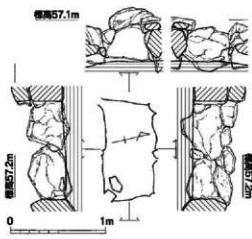


図63 小石室墳 SO-01石室、遺物出土状況、出土遺物実測図
(縮尺1/40、1/20、1/4)

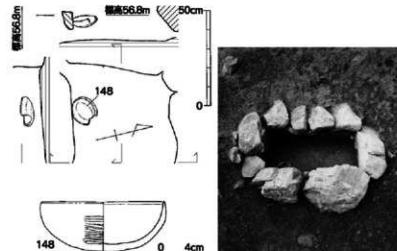


図64 SO-01石室全景(南から)

まとめ

5. まとめ

最後に、今回の調査で得られた羽根戸古墳群N群の20号墳、21号墳および小石室墳SO-01のいくつかの特徴について所見を述べて、まとめて代えるものとする。

N-20号墳

N-20号墳は、市道の開削によって大きく破壊されており、墳丘や石室の規模や構造について明確にできない点が多い。墳丘規模は、石室の中心から墳裾までの距離を反転して、直径15.0m程度の円墳と推定される。段築は確認できなかった。羽根戸古墳群では、これまで10次にわたる発掘調査が行われてきた。このうちN群で墳丘規模が15m前後のは、1、8、16号墳など非常に少ない。20号墳では、後背側墳丘しか達成していなかったものの、特に墳丘Ⅲ区では、盛土と互層状に外護列石を少なくとも3段階にわたって構築している様子が確認できた。盛土は版築状態に叩き締められていたものの、竹木の根の侵食が激しく、構築過程を詳細に観察することができなかった。おそらくは、外護列石と盛土による墳丘の構築過程を数段階にわけて行ったものと推測される。

内部主体は横穴式石室で、玄室は奥幅196cmを測り、左側壁は258cm以上であり、比較的大きい部類に属するものと推測される。

出土遺物は、表土層から鉄刀片が1点出土したのみで、時期を示す遺物が出土していないが、奥壁腰石に3石を使用し、側壁も腰石には4石以上を使用し、やや小振りな石材を多用することなどから、6世紀の後半でも早い段階に位置づけられる可能性がある。

N-21号墳

N-21号墳は、墳丘や内部主体が大きく破壊されているものの、規模や構造、また出土遺物について様々な所見が得られた。

内部主体には、竪穴系横口式石室を有する。玄室規模は、奥幅126cm、前幅93cm、右側壁長270cm、左側壁長274cmを測る狹長な羽子板形平面を呈する。床面は前半部を中心に約2/3が擾乱されていたもの

の、後半部から副葬状態を示す鉄器類等が出土している。

鉄器の内容は、鉄刀×1、鉄鎌×1、鉄斧×1、鏟子×1、刀子×2、および鉄鐵片數個体分が確認された。鉄製武器以外の農工具が比較的目立ち、被葬者が耕作生産に関わっていた可能性を示唆するものと推測される。また、鏟子は福岡市内でも松原遺跡で出土したものなど数例が知られているのみであり、貴重な発見となった。また鏟子には、ハエの留縫駆逐跡が確認され、古墳時代の葬送儀礼を完結する上で貴重な発見となった。また、鉄刀は木製の鞘に収められていたが、鞘と考えられる組紐が巻かれていた。

N-21号墳丘出土の須恵器は、坪蓋(2)と、坪身(7)が、その器形の特徴からやや古相を留めているものと考えられる。墳丘の盛土内から出土した坪蓋(1)は、径が小さく出土遺物の中では新しい特徴を具えており、築造年代を示す遺物と考えられる。盛土内から出土した坪蓋(1)については、周辺に炭化物片が多く見られたことなどを含めて、墳丘構築時に執り行われた祭祀の痕跡と推定されるが、面的に確認することができなかつた。このように出土遺物については若干の時期差が看守されるが、これらは同時に存在したものと考えて大過なかろう。

N-21号墳の築造年代は、出土した土器類の年代観から、6世紀初頭と考えられ、表道部分の土層断面観察から、初葬を含めて少なくとも2回の埋葬があったものと考えられる。

SO-01小石室墳

SO-01小石室墳は、N-21号墳の墳丘裾部で検出された。N-21号墳の墳丘盛土を切って石室掘方を掘削しているということ、また、副葬された土器鉢の体部が21号墳出土のそれより浅い等といった器形の特徴等から、21号墳に後出するものと考えられる。

今回の調査で確認した古墳群の築造年代は、21号墳→SO-01小石室墳→20号墳の順番と考えられる。

第5章 羽根戸古墳群N—20・21号墳出土遺物の保存科学的調査について

比佐 陽一郎（福岡市埋蔵文化財センター）

1.はじめに

羽根戸古墳群N群の出土品は、21号墳を中心に保存処理に伴う調査によって興味深い知見が得られているので、その内容について記す。保存処理の対象となった遺物はガラス製品と鉄製品で、ガラス製品は小玉1点、鉄製品は鉄刀2点、鉄鏃4片、袋状斧1点、鎌1点、鑓子1点である。考古学的知見は本文に譲る。

2.ガラス製品

ガラス小玉は青紺色で、着手前の顕微鏡観察では孔内に紐などの残存は認められなかったため、アルコールと蒸留水の混合液によるクリーニングを実施した。その後の顕微鏡観察では、孔の長軸方向に平行して並ぶ大小の気泡が観察されており、引き延ばした管ガラスを切断して、加熱によって角を丸くした製作技法が想定される（小瀬 1987）。また蛍光X線による材質分析では、中央アジア以西が起源とされる、低マンガンのコバルト着色による低アルミニナタイプのソーダ石灰ガラス（肥塚 2003）と推定されるピークが示されている。技法、材質共に古墳後期の資料に通有のものといえる。

3.鉄製品

鉄製品で注目されるのは有機物の付着、残存である。鉄刀22と袋状斧を除く資料で、何らかの有機物が認められる。以下、資料ごとに見ていきたい。

まず鉄鏃では、茎部分に箭の木質やそれを固定する樹皮と見られる物質が観察される。一部には比較的広範囲に遺存しているものもあり、今回種の同定は行っていないが、将来調査を行う上で良好なデータを提供できる資料といえる。

次に鉄刀23では、刀身全体に箭の木質と、中央付近12cm程の範囲内には、そこに巻かれた幅広の紐、そして柄の背部側面には長さ3cm程度の極限られた範囲に、柄巻の破断面が観察できる。木質は蓋った年輪が明瞭に認められ、何らかの針葉樹であることが窺える。紐は幅8～9mm程の平たい構造で、紐糸と考えられる。現状で13巻分が確認でき、重なりをもたず巻かれている。出土資料の組紐については小村眞理氏や沢田むつ代氏の研究が詳しい（小村 2004・沢田 2001）、本資料の場合、紐糸に鉄錆が染みて糸の状態観察を困難にしていることと、筆者が組紐の構造を十分に理解できていないことで、技法の判別はできていない。以前、沢田氏に資料を観察していただいた際には、二条輪一間組（小村氏の「2方向斜行繩連組紐」とのコメント）とのコメントを頂戴しているが、それをそのまま記すしかない。ただ、糸の配列が比較的見える部分では、蓋った矢羽根状の文様は形成されていないようで、素人目にあまり丁寧な作りに見えない。また脱落した断片を樹脂包埋しクロスセクションの観察を行ったところ、紐糸の断面形状は箭の特徴を示している。

柄巻は、破断面からの観察では1巻き（単位）の中に2つの空洞が存在する。これは加古千恵子氏らによって報告された「織維の束2束を1本の紐にしたもの」と同様の技法と見られる（加古他 1993）。これは他にも類例が幾つか示されており（藤田 1999・大澤 2005）、決して特異なものではないようである。

鎌では、身の両面に刃に対して直角から若干ずれる角度で木質と見られる痕跡が残る。角度は両面

で壊っているものの残存範囲は大部分で重複していない。また残存範囲が基部の折り返しから離れた部分で、刃に対する角度も不自然なため、柄の木質とすれば抜けかけた状態で置かれていたものと考えられる。

他、鎌の刃部先端、刀子の鋒（背）、鏃子の全体に織物の残存が認められる。その多くは粗めの平織りで、銅錫が染みこんだためか未來の色調や質感は失い茶褐色を呈している。特に鎌、刀子に関しては劣化、分解が進んでいるよう、繊維に関する情報はほとんど得られない状況である。しかし鏃子では、その全面にわたって断続的に残り、部分的には詳細な観察が可能である。それによれば大部分は粗い織目（測定可能な箇所では3mm 角の範囲内で絹糸、綿糸ともに4本）の布であるが、一ヵ所、非常に目の詰まった織物も認められ（同じく2mm 角の範囲内で絹糸6本、綿糸4本）、複数種が付着する可能性もある。糸の太さは概ね0.3mm 前後であるが、0.5mm 前後と太い部分も見られ幅がある。糸の捻りも強い部分とほとんど認められない部分とがあるが、見える範囲ではS捻りである。これらはクロスセクション観察は行っていないが、麻と推測される。鏃子の各部分を取り巻くように残存している状況からは、衣服などの布が接触したのではなく、意図的にくるんだものと考えられる。

4. ハエ囲縄殻について

最後に鏃子と刀子に残る、やや特異な痕跡について触れておきたい。それはハエ囲縄殻と呼ばれるもので、文字通りハエの蛹の抜け殻である。鏃子では長さ4～5mm、幅1.5mm 程度の蝶形をしたもの13個体が全体に散在。刀子ではやや残存状態が悪く大きさを正確に把握できるものはないが、刃部片の両面で10個程度確認できる。これらは大きさや長軸に対して直行して巡る条線と呼ばれる特徴などから、ヒメクロバエ属のものと考えられる。特に鏃子においては立脚の形状を保ったものがあり、気門と呼ばれる呼吸器官の部分も残存していた。囲縄殻からの同定にはこの部分の形状が決め手になるとのことで、電子顕微鏡による観察も試みたが、残念ながらこれ以上の同定は困難であった。

筆者が最初にハエ囲縄殻について認識したのは、福岡県八女市鶴見山古墳から出土した鱗と見られる青銅片においてである。その報告（比佐2005）の中でも触れているが、当初、何であるか皆目見当が付かなかった中、九州大学田中良之氏による愛媛県桑田池古墳出土人骨の調査報告によく似たものが示されており、その正体を知りに至ったのである（田中2003）。田中氏は、ヒメクロバエの、新鮮な死体ではなく腐肉にたかり、動物実験でも死後3～4日後にあらわれるといった性質や、産卵繁殖には光や開かれた環境が必要であることなどから、遺骸が一定期間オープンな環境におかれた後、埋葬されたことを想定し、更に人骨の状況と合わせて古代の「穢」と結びつけた考察をされている。

しかし、これまで携わってきた金属器の保存処理を振り返ったとき、この様な痕跡は決して普通では無いものの、頭の片隅に記憶として残っているようなものにも思われたが、案の定、この羽根戸古墳群の資料で発見された他、字幕式に類例の情報も集まっている。宇野慎敏、大澤元裕両氏からは5世紀末～6世紀初頭と考えられる行橋市稻畠8号墳の甲冑部材（小札）についてご教示いただいた。ここでもやはり、4～5mm 大で長軸に直行する条線がめぐる楕円形の座みが見られる。本遺跡では多数の鉄器が出土するが、小札以外の多くのクリーニングや樹脂含浸が施され、他の資料に残存していくかを知るのが困難なのは皮肉といわざるを得ない。宮崎県では東窓原氏より、地下式横穴墓から出土した鉄器に付着していることが早くから紹介されていたこと（戸高1989）や、他にも類例が存在すること（東2005）を、また最近発刊された岡林孝作氏の論功にも、幾つかの事例が紹介されていること（岡林2006）は今津瀬生氏から、それぞれご教示いただいた。この他、筆者がたまたま目にした、韓国の報告書にも苧浦里E地区3号墳で有棘利器1点、大邱西邊洞古墳群21号墓の鉄矛2点と、同17号墓の鉄矛1点で、実測図に同様の状況が記されている例があるなど（釜山大學校博物館1987・その他

2001)、国外にも広がりを見せていく。

囲縫鉗の付着は、その器物が蛆のわいた人体に接触していたことを示すものであり、羽根戸古墳群N-21号墳の場合も、他の有機物が残存する中で囲縫鉗の付着する器種は刀子と鑑子に限られていることは、特に鑑子の用途を考える上で示唆的である。この様な痕跡はこれまで「知る人ぞ知る」ものであつたが、田中氏の研究によってその存在意義は飛躍的に高まつたと評価できる。しかし逆に認識が深まっていない現状では、場合によっては見過され、最悪は保存処理に伴う物理的クリーニングで取り除かれてしまう危険もある。保存科学の現場から考古学により多くの情報を提示するためにも、認識の多少や主觀に左右されることなくこの様な事例を残し、報告することの必要性を痛感するものである。また古代の葬送儀礼についての考察を深めるためには、付着する器種、それが存在する時代・地域、埋葬施設の属性などの検討も必要で、それには普遍性の見極めが不可欠であろう。ハエの蛹に隠す金属器に付着する痕跡への注意や認識が深まり、より研究の幅が広がることを期待したい。

なお、武刀組紐のクロスセクションデータは、埋蔵文化財センター片多雅樹氏の作成によるものである。また、ハエ工縫通紐については文中に記した方々以外にも、田中良之氏のご紹介で九州大学鷲尾氏から特にハエの同定について貴重なご意見を伺うことができた。ご協力いただいたすべての方々に、本文最後ながら記して感謝申上げます。

参考文献

- 大澤元裕 2005 「童島古墳群の武器について」『童島古墳群』 行橋市文化財調査報告書第32集 行橋市教育委員会

岡林幸作 2005 「三重県安濃町北浦出土に付属したハコガ美術」『JAS 先史デジタルリカウド古鏡鑑賞』学生社

加古千恵子・藤田昭・岡田文男 1993 「出土金銀製品に伴う有機質遺物の観察」『日本文化財科学会第10回大会研究発表会要旨集』日本文化財科学会

小村眞理 2004 「古代から中世の相振の等級」『保存科学研究集会2004「銅彩色文化財の世界」—保存科学をキーワードとして—』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所

肥塚隆祐 2003 「日本出土ガラスの考古学的研究—古代ガラス材質とその歴史的変遷ー」『考古学の総合的研究』

平成14-14年度科学研究費補助金研究成果報告書 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所・沢田正昭

小瀬康行 1987 「管切り法によるガラス小玉の成形」『考古学雑誌』第73巻第2号 日本書古學會

沢田むづて 2001 「出土物に付着した樹脂について」『島内地下式横穴墓群』えびの市埋蔵文化財調査報告書第29号

佐谷崎島えびの市教育委員会

田中良之 2003 「人骨およびハエ巣殻からみた疾について」『熊池古墳』松山市文化財調査報告書 92 松山市教育委員会

戸高賀知子 1989 「奥津城の侵入者たち」『宮崎考古』石川恒太郎先生米寿記念特集号上巻 宮崎考古学会

比佐陽一郎 2005 「『鶴見山古墳出土金属器の保存科学的事前調査について』『鶴見山古墳2』八女市文化財 調査報告書 第72集 八女市教育委員会

東 忠章 2005 「黒瓦の伝承状態を有する地下式横穴墓出土の鉄製品と古人骨」『博物館研究』Vol.40 No.12 (財)日本博物館協会

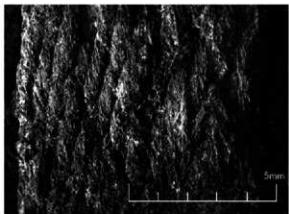
藤田 洋 1999 「金属製品に遺存する有機質遺物について」『向山古墳群・市乗寺古墳群・一乗寺經原・矢切跡遺跡』兵庫県文化財調査報告第191冊 兵庫県教育委員会

釜山大學校博物館 1987 「新川芋原丘陵E地区遺跡」釜山大學校博物館遺蹟調査報告第11號

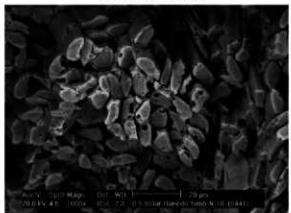
吉野哲・各孟・寺・井川千尋(編) 2004 「大邱西邊遺跡古墳群」『嶺南文化財研究院學術調査報告第40冊 (財)嶺南文化財研究所』



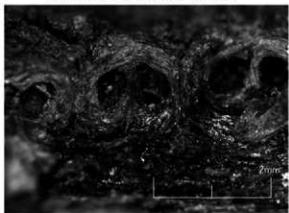
1. 鉄刀組織残存状況



2. 組織の実体顕微鏡写真（約10倍）



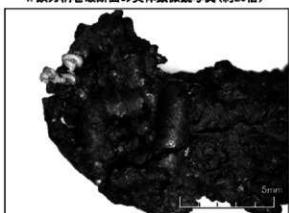
3. 組織繊維断面の電子顕微鏡写真（約1000倍）



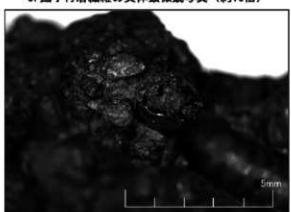
4. 鉄刀柄巻破断面の実体顕微鏡写真（約20倍）



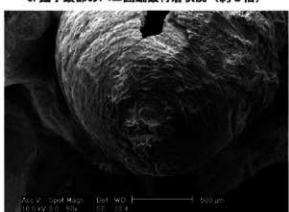
5. 銚子付着繊維の実体顕微鏡写真（約10倍）



6. 銚子頭部のハエ巻繩附着状況（約6倍）



7. 銚子付着のハエ巻繩（約20倍）



8. 回蝶巻気門部分の電子顕微鏡写真（約50倍）

報告書抄録

ふりがな	はねどこふんぐんろく							
書名	羽根戸古墳群6							
副書名	羽根戸古墳群第9・10次調査報告書							
卷次								
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第915集							
編著者名	松浦 一之介							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	福岡市中央区天神一丁目8番1号 電話 092-711-4667							
発行年月日	平成18年12月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
はねどこふんぐん 羽根戸古墳群 く・じゅうじ 9・10 次	ふくおかし 福岡県福岡市 西区大字羽根戸 あざねむら 字大原	40130	33° 32° 46°	130° 18° 13°	2004.08.02 5 2004.11.19	702	農業用施設建設	
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
羽根戸古墳群	墳墓	古墳時代	古墳	須恵器 土師器 鉄器	古墳時代後期の群集墳調査。			

羽根戸古墳群6

—羽根戸古墳群N群第9・10次調査報告書—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第915集

2006年12月28日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8番1号
電話 092-711-4667

印刷 田堀印刷有限公司
福岡市中央区草香江一丁目8番24号
電話 092-751-1785